「SDGsスタディツアー in ナミビア」報告書

2019 年 8 月 31 日～9 月 9 日

2019 年度スタディツアー参加学生一同

聖心女子大学 永田佳之研究室（教育学科）

2019 年度 SDGs スタディツアー報告書

「SDGs スタディツアー in ナミビア」

2019.8.31～9.9

聖心女子大学　現代教養学部教育学科

「発展途上国における教育問題Ⅰ」

はじめに

「国連 ESD（持続可能な開発のための教育）の 10 年」がスタートして 15 年が経ちました。当初、教育を通して持続可能な世界をつくろうとするこの国際的な運動は欧米主導であったといえます。ところが、10 年ほど前、デンマークの国際協力機関を訪問した際、「ESD 実践の最先端はナミビアにある」と聞いて、肝をつぶしたことを覚えています。ナミビアは、アフリカ諸国の中でも独立して間もない新生国家。しかも、国土の多くは不毛と言われる砂漠地帯の決して豊かとは言えない地域です。そのような地域に最先端と言われる教育プログラムが開発されようとしている、と専門家から伝えられたのです。

帰国後、調べてみると、NaDEET（ナミブ砂漠環境教育トラスト）という団体があり、ナミブ砂漠で「究極のサスティナビリティ」に関する体験的な学習を展開していることが分かりました。当時、各国で試行錯誤が続いていた ESD の教材を開発し、現代では ESD の最優先課題と言われる「ホールスクール・アプローチ（学校全体で持続可能な未来をめざす取り組み）」を「10 年」の間でいち早く提唱していたのです。

私が NaDEET と「再会」したのは、国際審査委員を務めているユネスコ／日本 ESD の選考においてでした。世界中の ESD の優良実践団体を相手に 4 度目の挑戦で ESD 賞を受賞した団体が NaDEET だったのです。2018 年秋、ユネスコ本部で開催された授賞式と「受賞者代表と審査委員とのダイアローグ」で NaDEET 代表であるヴィクトリア・ケディングさんと彼女の夫であり、職員でもあるアンドレアスさんと会い、彼らの受賞スピーチと実践報告を聞き、団体の実践がホンモノであることを確信しました。

今回のツアーは、この確信を端緒に生まれ、世界でも屈指の ESD 実践と、そしてその実践を支える職員の生き方や代表の人生観にふれて欲しいという願いのもとに、200 回を超える受け入れ団体との遣り取りと海外での打ち合わせを経て実現したものです。

上記の「10 年」に終止符が打たれた翌年の 2015 年から、国連では SDGs（持続可能な開発目標）が始まり、2019 年のユネスコ総会で ESD はその諸目標を実現するための教育、すなわち‘ESD for 2030’として位置づけられるに至りました。ツアーに参加した 12 名の学生は「令和の共通教養」とも言われる SDGs の担い手となる「SDGs ネイティブ」です。今回の旅で培った知識や技能、感性や正義感を活かして今後どのような道を歩んでいくのかが楽しみでなりません。

最後になりますが、今回のスタディツアーの実現までのプロセスでご理解をいただいた保護者の方々はじめ、聖心女子大学の教職員の皆様、そしてご指導・助言をいただいた元ナミビア JICA 海外協力隊員の寺内啓人様、ESD 研究者として学生に傾聴しながら旅を共にして下さった岐阜聖徳学園大学短期大学部の木戸啓絵先生に心からのお礼をこの場を借りてお伝えします。ありがとうございました。

SDGs スタディツアー in ナミビア 世話人・永田佳之

目次

はじめに..... i

目次..... ii

1. SDGs スタディツアー参加者..... 1

2. 日程..... 2

3. SDGs について..... 5

4. ナミビア共和国の基本情報..... 6

5. NaDEET について..... 7

6. 訪問場所の紹介..... 25

7. T シャツ販売を通した寄付..... 33

8. アンケート結果..... 34

9. 感想..... 47

10. フォトギャラリー..... 65

11. NaDEET 代表 Viktoria さんのプレゼンテーション資料..... 70

むすびにかえて..... 74

1. SDGs スタディツアー参加者

【学生】

・ＹＮ
基礎課程　１年

・ＮＵ
英語英文学科２年

・ＹＹ
教育学科教育学専攻２年

・ＡＹ
教育学科教育学専攻２年

・ＫＩ
国際交流学科異文化コミュニケーション２年

・ＭＨ
教育学科教育学専攻２年

・ＲＯ
教育学科教育学専攻２年

・ＨＡ
教育学科教育学専攻３年

・ＫＮ
教育学科教育学専攻３年

・ＲＩ
国際交流学科国際政治専攻４年

・ＮＴ
教育学科教育学専攻４年

・ＨＭ
教育学科教育学専攻４年

【教員】

・永田佳之　YOSHIYUKI NAGATA
聖心女子大学現代教養学部教育学科教授

・木戸啓絵　HIROE KIDO
岐阜聖徳学園大学短期大学部幼児教育学科
専任講師

・水島尚喜　NAOKI MIZUSHIMA
聖心女子大学現代教養学部教育学科教授

2. 日程表

日にち	時間帯	内容
8 月 31 日(Sat)	午後	集合 成田国際空港発 香港国際空港着 香港国際空港発
9 月 1 日(Sun)	午前	ヨハネスブルク国際空港着 ヨハネスブルク国際空港発 ウィントフック・ホセア・クタコ国際空港着 ウィントフック市内へ
	午後	市内のホテル（Roof of Africa Hotel）到着 市内のレストラン（Joe's Beerhouse）にて夕食
9 月 2 日(Mon)	午前	現地の小学校（St. Joseph's Primary School）を訪問 -施設見学 -小学生や先生がとの交流会 -昼食
	午後	ナミブ砂漠にある環境センター（NaDEET: Namib Desert Environmental Education Trust） 到着 -オリエンテーション -夕食 -振り返りの会（ラップアップ）
9 月 3 日(Tue)	午前	-ファイヤーボールを利用した朝食作り -朝食 -代表による NaDEET に関するレクチャー -ソーラークッキング -Viktoria 代表による環境教育に関するレクチャー
	午後	-昼食 -エネルギー使用量に関するフィールドワーク -Viktoria 代表による持続可能性に関するレクチャー -夕食

		-星空観察及び郊外に関する野外レクチャー -振り返りの会（ラップアップ）
9 月 4 日(Wed)	午前	-ファイヤーボールを利用した朝食作り -朝食 -砂丘での生き物観察（砂漠の生物多様性） -ソーラークッキング
	午後	-昼食 -NaDEET 事務所及び野菜畑訪問 -ファイヤーボール作り -砂丘での一人の時間 -夕食 -NaDEET の職員との交流会 -振り返りの会（ラップアップ）
9 月 5 日(Thu)	午前	-ファイヤーボールを利用した朝食作り -朝食 -各部屋の清掃 -NaDEET での学びを分かち合う会 NaDEET 出発 セスリムの渓谷訪問
	午後	昼食 セスリムのキャンプ場にてテント設置 セスリムの砂丘（No.45）を登山 キャンプ場にて夕食 振り返りの会（ラップアップ）
9 月 6 日(Fri)	午前	デッド・フレイ（Deadvlei）を訪問 朝食 南回帰線（Tropic of Capricorn）に立ち寄る
	午後	昼食 宿泊施設（スワコプムンドのホテル）到着 海岸沿いのレストランにて夕食 振り返りの会（ラップアップ）
9 月 7 日(Sat)	午前	朝食 都市生活のためのエコ・ハウス（NaDEET Urban Sustainability Center）訪問

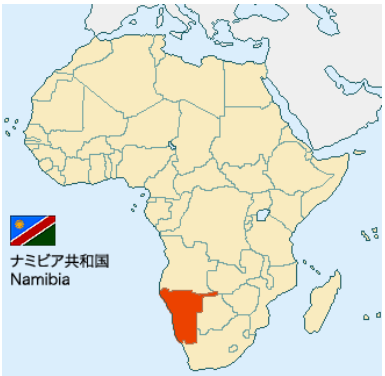
	午後	昼食 キャンプ場にてテント設置 サファリ体験 夕食 振り返りの会（ラップアップ）
9 月 8 日(Sun)	午前	朝食 ウィントフック・ホセア・クタコ国際空港発
	午後	ヨハネスブルク国際空港着 振り返りの会（ラップアップ） ヨハネスブルク国際空港発
9 月 9 日(Mon)	午前	香港国際空港着
	午後	香港国際空港発 羽田空港着

3. SDGs とは？

本スタディツアーのテーマは SDGs である。SDGs とは、「Sustainable Development Goals」の略称であり、2001 年に策定されたミレニアム開発目標(MDGs)の後継として、2015 年 9 月の国連サミットで採択された 2016 年から 2030 年までの国際目標である。この目標は、持続可能な世界を実現するために、17 の目標と 169 のターゲットから構成されており、地球上の誰一人として取り残さないことを誓っている。

17 の目標の中には、貧困から社会福祉、教育、環境、ジェンダーなどの世界で起こるあらゆる問題に向き合った目標がある。今世紀に入り、地球温暖化によって海面上昇や干ばつが深刻化されている。この影響により、動物や植物が減少するだけでなく、伝染病の恐れもある。さらに、貧富の格差や紛争の数が増えており、難民・避難民の数が第二次世界大戦以降、最高の水準となっている。このように、地球温暖化は環境問題だけにとどまらず、貧困問題にまでも発展する。そこで、美しい地球を保つために生まれた SDGs は、全ての国連加盟国が約束した、経済・社会・環境の側面を包括的に推し進めながら、2030 年までにあらゆる形態の貧困に終止符を打つという非常に野心的な「世界レベルの社会契約」という見方もなされている。

4. ナミビア共和国の基本情報



正 式 名 称：ナミビア共和国

首　　都：ウィントフック(人口約 36 万人)

面　　積：82.4 ㎢(日本の約 2.2 倍)

人　　口：253.4 万人(京都市と同じくらい)　(2017 年)

民　　族：オバンボ族 50%、カバンゴ族 9 %、
ダマラ族 7 %、ヘレロ族 7 %、ナマ族 5 %　他

公　用　語：英語(アフリカーンス語、ドイツ語、各部族語

国　祭　日：3 月 21 日(独立記念日)

宗　　教：キリスト教(約 8 ~ 9 割)、土着宗教

元　　首：ヘイジ・ガインコブ大統領(Hage Geingob)

政　　体：共和制(1990 年に独立)

議　　会：二院制(国民議会・国民評議会)

通　　貨：ナミビアドル

主要貿易国：《輸出》南アフリカ(24%)、ボツワナ(13%)、スイス(10%)
《輸入》南アフリカ(56%)、ボツワナ(6 %)、中国(5 %)　(2017 年)

邦　人　数：17 名(2018 年 12 月現在)

世 界 遺 産：ナミブ砂漠、トゥウェイフルフォンテーン(岩石線画群からなる遺跡)

主 要 産 業：(農)牧畜
(鉱)ダイヤモンド、銅、ウラン、亜鉛
(漁)アジ、エビ、カニ
観光業

主　　食：PAP（穀物を粉にしてお湯で練ったもの）

G　D　P：132.4 億米ドル(2017 年)

参考文献

外務省「ナミビア基礎データ」
〈https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/namibia/data.html〉
(2019 年 10 月 18 日参照)

5. NaDEET について

5-1 NaDEET の概要

5-2 NaDEET の理念と3つの目標

5-3 食生活

5-4 水

5-5 エネルギー

5-6 星空観察

5-7 砂漠での生き物観察

5-8 ライト・ポリューション

5-9 NaDEET Urban Sustainability Center

5-10 ハンズオン教材

5-1 NaDEET の概要

The Namib Desert Environmental Education Trust（NaDEET）

－ナミブ砂漠環境教育トラスト－

（1）NaDEET とは

日常生活で実践できる持続可能な生活の体験学習を通して学ぶ環境教育施設。「教えることを実践する」をモットーに、地球に負荷をかけず、寝る、入浴、料理などの日常生活を実践できるよう工夫された施設となっている。

場所：ハルダプ州ナミブランド自然保護地区にあるナミブ砂漠の砂丘に位置する。

（2）NaDEET での学習テーマ

身近なサスティナビリティについて学ぶ

・エネルギー

・水

・食

・ゴミ

・生物多様性

・光害

〈アクティビティの例〉

・ソーラークッキング

・持続可能なエネルギーの調査

・エコロジカル・フットプリントの測定（※注１）

・夜行性動物の観察

・星の観察

（3）学習の目的

環境問題、環境問題の解決策、サスティナブル（持続可能）なライフスタイルについて学び、ナミビア共和国の文化、環境について、さらには普遍的なサスティナビリティの課題についての理解を得る。

（4）なぜ NaDEET で学ぶか

国連にて、2030 年までに達成すべき世界の目標として SDGs（「持続可能な開発目標」）が掲げられている。このスタディツアーの目的は「持続可能な開発」を「持続可能な暮らし」という視点から捉えなおし、人間と環境の関係性について体験的に学ぶことである。NaDEET は UNESCO /Japan ESD Award（ユネスコ／日本 ESD 賞）を 2018 年に受賞しており、「持続可能な暮らし」について学習できる優れた、世界的にも知られた環境教育センターである。

（5）NaDEET 創立の歴史

ナミビア共和国の環境教育は、1980 年後半から 1990 年代初頭に始まった。ナミビア共和国政府といくつかの非政府組織がすべてのナミビアの若者のために、環境教育センターを設立した。NaDEET 創設者である Viktoria Keding と Andreas Keding は、環境センターで働いているときに、教えられていることと学んだこととの間の矛盾に気が付いた。後に、彼らはその矛盾を解決する NaDEET（環境教育センター）を設立する

(6)NaDEET の創設者

Viktoria Keding

NaDEET のディレクター、創設者の 1 人。運営、参加者への教育、プログラムの開発などすべての面で NaDEET のリーダーとして活動している。ナミビア共和国の Climate Change Ambassador と Conservation Ambassador 2014 を務めている。また 2 児の母でもある。

Andreas Keding

NaDEET の建設メンテナンスおよびその他すべての技術作業のすべての側面を担当する技術指導者。Viktoria の夫。

※注 1　エコロジカル・フットプリント

エコロジカル・フットプリントとは、人間活動により消費される資源量を分析・評価する手法のひとつで、人間 1 人が持続可能な生活を送るのに必要な生産可能な土地面積として表わされる。人間が地球環境に及ぼす影響の大きさを見ることができる。

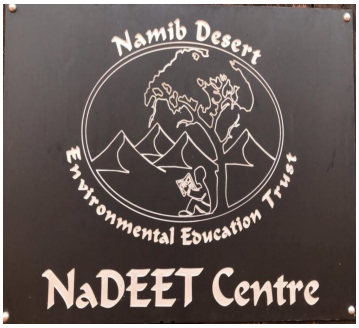
5-2 NaDEET の理念と3つの目標

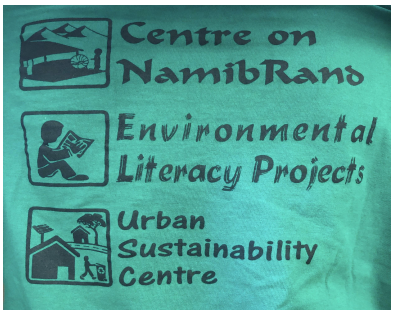
（1）理念

“We practice what we teach”.

「教えることを実践する」

NaDEET では、上記の理念を、施設の建物を含めた環境全般において実践している。また、環境教育センター(宿泊施設)において 寝る、シャワーを浴びる、料理をする、食べるなどの日常生活の送る中で参加者に大きな印象を与え、持続可能性の原則をどのように自分たちの日常生活に取り入れることができるか考える契機を与えることができると考えている。





（2）3つの目標

① Center on Namibrand（ナミビア共和国を中心に）

NaDEET での環境教育は、ナミビア人を主な対象として 3 ～ 5 日間の体験型の環境教育プログラムを提供している。 プログラムのほとんどは小学生が参加しているが、中等学校、学外の若者、教育者、地域の住人、海外からの訪問者にも適応したコースを提供している。

② Environmental Literacy Project（環境リテラシープロジェクト）

NaDEET の主な環境リテラシープロジェクトは、ナミビア共和国のすべての学習者、教育者、関心のある市民が無料で入手できる、ブッシュテレグラフと呼ばれる若者向け雑誌である。現在、約 18,000 人の学習者と教育者が購読しており、読書を通して私たちの環境に対する知識を高め、態度を改善することを目指している。“it's time to…”という名前のアクティビティブックとガイドブックシリーズの資料を作成しており、これらの資料は、理解しやすいように基本的な英語とアフリカーンス語また、ナミビア共和国の地域ごとで使用されている言語で書かれている。この情報の普及を促進するために、すべての出版物は web サイトにお

いて無料でダウンロードできる。

③ Urban Sustainabilty Center（都市持続可能性センター）

2014 年から、NaDEET はスワコプムントに NaDEET Urban Sustainability Center を 2019 年 10 月に開設した。当施設は、教育者主導のプログラムと自主的な活動を通じて、ライフスタイルの選択において、環境問題に対する適切な日常的な解決策を見つけるためのアイデアを提供することを目指している。モデルハウスのような設計になっており、訪問者は、持続可能なライフスタイルの実践において、平均的なナミビア共和国の家庭が環境に対してどのような影響を与え、問題があるか探ることができる。 キッチン・リビングルームでは、再利用した資源を使い、どのようにエネルギーと水の効率性を実践しているのか、家庭廃棄物を管理しているのかを発見する仕組みとなっている。 さらに、活動、実験を行うことにより、栄養、輸送、園芸などのトピックを調べることができる。また、ナミビア共和国の持続可能な開発の背景にある環境問題に関する原因と現在の情報、NaDEET とナミビア共和国での環境教育に関する情報も学ぶことができる。

5-3 食生活

(1)有機栽培

NaDEET では有機栽培をしていて、そこで収穫されている野菜は汲み取り式トイレ(ぼっとんトイレ)によって蓄積された排泄物を堆肥として作られていた。また日本の“ぼかし肥料”の技術にも注目しており、食べ終わったみかんの皮や生ゴミを発酵させるなどして実践していた。ぼかし肥料とは即効性があり食物の成長にすぐ効く化学肥料に対して、畑の土にいる微生物そのものを活性化させ、バランスの良い生育を促す有機肥料のことである。遠く離れたナミビア共和国で日本の知恵が役に立っていることを感じた瞬間だった。

NaDEET にある家庭菜園の様子
⇒タイヤやお手製の木箱を利用している事から工夫を凝らしていることがわかる

(2)ファイヤーボール

ファイヤーボールとは、簡単に言うと手作りの着火剤である。材料は使用しなくなった紙や新聞紙などの古紙、水、おがくずのみだ。作り方もとても単純で大きな水槽のようなものに水を入れ、その中に古紙を入れて粉々に引きちぎりテニスボールくらいに丸めて乾燥させたら完成である。とても簡単に誰でも作れるこのファイヤーボールは本当に便利で、これを使うだけで火力が強くなる。BBQ やキャンプの際に大活躍できそうだと感じた。

左）ファイヤボールを作っている様子

右）完成したファイヤーボール

（3）ソーラークッキング

ソーラークッキングとはその名の通り、専用の道具を使い太陽の熱を利用して調理することである。確かに、太陽の出ている時間帯にしか出来ないという制約はあるものの、時間も電気もガスも使わないうえに、CO_2も排出しない。まさに“Sustainable”という単語がぴったりである。

ソーラークッキングを体験する前は太陽の熱だけで本当に料理が出来るのだろうかという懸念があり、ピザ作りをした際には、正直これでピザが本当に焼けるのかなと思っていた。しかし、太陽の動きに沿って位置を微調整しに行くたびに段々とチーズがとろけていっていることを目の当たりにした。想像よりもずっとはやく、そして簡単に出来上がったので驚いたと共に単純に「太陽ってすごいなぁ」と太陽の偉大さ、有難さを感じた。

ソーラークッキングの説明をしている NaDEET 職員

左）みんなで実際に作ったピザ　　右）NaDEET にあるソーラークッキングの設備

5-4 水

（1）水はどこからきているのか

NaDEET での生活では使用する水は少し離れた NaDEET の事務所にある貯水塔で組み上げた地下水を使用している。この地下水は、深さ 650 メートルから湧き出ている。飲み水としても問題なく使うことができる。

（2）シャワー

蛇口をひねると水が出てくる仕組みではなく、バケツシャワーというバケツにジョウロの先を取り付けたものを使ってシャワーを浴びる。バケツに太陽光で温めたお湯と、冷たい水を混ぜて適温のお湯を作り、バケツシャワーに移し替える。そして、バケツシャワーに取り付けられているロープを引っ張り、バケツシャワーを固定し、ノズルを回すことで頭の上からお湯が出るようになる。**※①の写真参照**

（3）洗面台

洗面台にも蛇口がないためバケツに水を汲み、コップを使って顔を洗い、歯を磨く。トイレや夕食前の手を洗う洗面台を、業務用洗剤の空きボトルに水が入っており、必要な分の水だけ手にかけることで無駄を省いている。

（4）トイレ

トイレは流さないため水を使わない。私たちの排泄物はコンポストとして、畑の肥料とするために溜めておく。

（5）使用した水の量

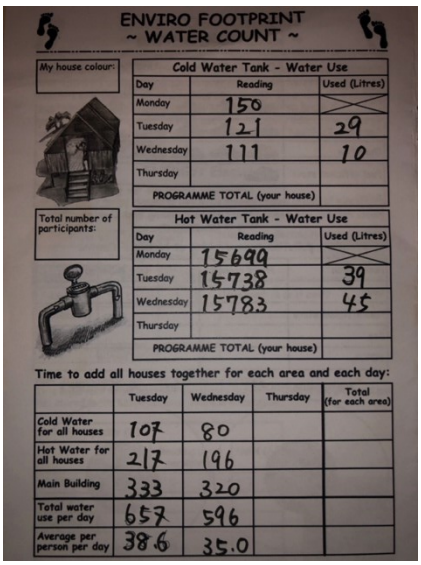
私たちは、丸２日間の水の使用量を記録し、自分たちの生活に必要最低限の水の量を目で見てわかるように比較した。すると、私たち一人当たりの水の使用量は、火曜日が、38.6 リットル、水曜日が 35.0 リットルの水で過ごしていることがわかった。東京で暮らす私たちは、日々、平均 219 リットルの水を使っている(東京都水道局 HP、２０１９年)。しかし、私たちが本当に必要なのは、6 分の 1 の水だったことがわかった。**※②の図参照**

（6）無駄を省くために

水の無駄を省くためには、水道のメンテナンスが必要になる。ただの水滴でも、ちりとなって積もると水資源の大きな無駄に繋がってしまう。**※③の図参照**

①バケツシャワ

②使用した水の量



ENVIRO FOOTPRINT
~ WATER COUNT ~

My house colour:

Total number of participants:

Cold Water Tank - Water Use

Day	Reading	Used (Litres)
Monday	150	
Tuesday	121	29
Wednesday	111	10
Thursday		
PROGRAMME TOTAL (your house)		

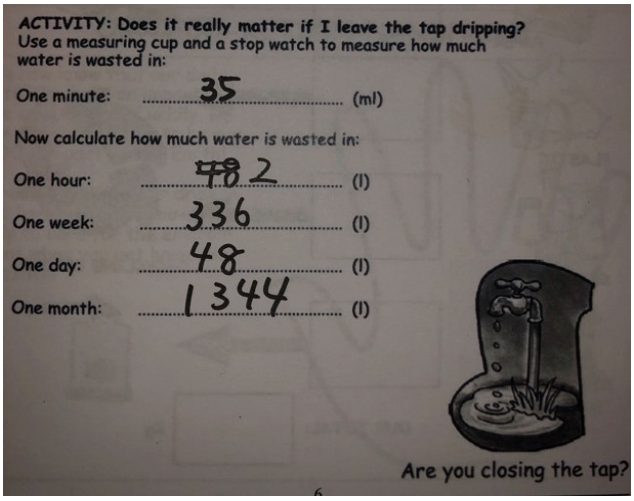
Hot Water Tank - Water Use

Day	Reading	Used (Litres)
Monday	15699	
Tuesday	15738	39
Wednesday	15783	45
Thursday		
PROGRAMME TOTAL (your house)		

Time to add all houses together for each area and each day:

	Tuesday	Wednesday	Thursday	Total (for each area)
Cold Water for all houses	107	80		
Hot Water for all houses	217	196		
Main Building	333	320		
Total water use per day	657	596		
Average per person per day	38.6	35.0		

③無駄を省くには



ACTIVITY: Does it really matter if I leave the tap dripping?
Use a measuring cup and a stop watch to measure how much water is wasted in:

One minute: 35 (ml)

Now calculate how much water is wasted in:

One hour: ~~78~~ 2 (l)

One week: 336 (l)

One day: 48 (l)

One month: 1344 (l)

Are you closing the tap?

参考文献

東京都水道局

〈https://www.waterworks.metro.tokyo.jp〉

（2019 年 10 月 18 日参照）

5-5 エネルギー

私たち人間は皆エネルギーに依存している。家庭レベルでは照明、暖房、調理などに必要とされ、世界経済においても、産業、輸送、通信のためにエネルギーに依存している。それらのエネルギーのほとんどが、木材、石炭、天然ガスなどの化石燃料から得られ、これらの燃料の燃焼には大量の CO_2を大気中に放出し、大気汚染を引き起こすのだ。しかし、CO_2が大気に放出されるだけではなく、それらの行為は地球温暖化を引き起こし、気候変動に繋がっている。

第一に日本ではどのくらいのエネルギーを使っているのだろうか。
日本は世界で 5 番目に多くのエネルギーを消費している。一人当たりの消費エネルギー量も世界平均の約 2 倍あるために、エネルギーの節約をしなければいけない。

現在日本では、電子レンジやルームエアコンの普及率は 8 割を超え、パソコンが急激な伸びを示し、家庭用電気機器は普及拡大と大型化や機能の高度化により消費電力も増えている。また、電気製品や自動車は、電気、ガス、ガソリンなどの直接的なエネルギーを使用しているが、このエネルギーは製品や衣服などを輸送する段階でも間接的なエネルギーとして多くのエネルギーが私たちの目の見えないところで使われている。

私達の豊かな行動や生活は自分自身住んでいる地球を傷つける行動へと繋がっているのだ。そして今回私たちは、この地球問題に対して私達よりもエネルギーを使用していないナミビア共和国でエネルギーを賢く使う方法について学んだ。

(1)使っていないコンセントを抜く

自分の部屋を思い返した時に、携帯の充電器やポットのコンセントなど挿しっぱなしのまま家を出てしまってはないだろうか。コンセントに挿しっぱなしにしていると、電化製品を使っていなくてもわずかに電力がかかってしまう。これを「待機時消費電力」という。1 年間の家庭で消費される電力量のうち、待機時消費電力は全体の約 6%といわれている。例えば、2 人暮らしの家庭の電気代が 1 ヶ月 1 万円、待機時消費電力を 6 %とすると、1 ヶ月の待機時消費電力は 600 円、年間にすると 7,200 円がかかっている、ということになる。そのため、使っていない時以外にはコンセントを抜く必要がある。

NaDEET の野外授業では、アイロン、CD プレーヤーなどを使って、使用していない時にコンセントを挿したままにしているだけで、どのくらいの電気を使用しているのかを数値を見て学んだ。

（2）賢い買い物をする

私達の日常生活において新しい電気を買う時に W 数を確認するべきである。購入価格を見て決めてしまいがちであるが、電気使用量を支払う必要があることを忘れてはいけない。LED などは従来の電球よりも 70%も少ない電力を使用する。

NaDEET では、ほとんどの建物の上にソーラーパネルが付いていて、日中に出る太陽からのエネルギーでシャワーを浴びる時に使うお湯や電気などを作っている。

（3）ソーラーパネルの使用

ソーラーパネルは最初高価に思えるかもしれないが 0 ～20 年という長い目で見れば投資する価値のあるものである。NaDEET ではソーラーパネルを利用して、お湯を沸かしたり、料理を作るエネルギーとして利用していた。

NaDEET で働いている方々が身につけている帽子。帽子のつばの部分には、ソーラーパネルと扇風機が付いていて日中、外で作業をする際にこれを被れば太陽の光によって扇風機が動く仕組みになっている。

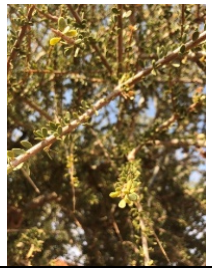
5-6 星空観察

星空観察では砂丘の上まで登り空一面に広がる星を観察した。南半球に来たからこそ見る事の出来た南十字星の見つけ方を教わった。また、日本の北斗七星が柄杓の形に似ていると言われているのと同じようにナミビア共和国ではキリンに見える星座もあることを知った。また、ひときわ明るい光を出しているホテルのライトを実際に見て、人工的な光の影響(ライトポリューション)の大きさについて学んだ。

5-7 砂漠での生き物観察

NaDEET 周辺の砂漠と砂丘の散策では、まず、NaDEET 周辺にいる生き物や植物について目でそのものを見ながら説明を受け学んだ。また、砂丘に上り、はじめて砂が広がり続ける世界を見た。砂丘の砂はその土地に元々あったものではなく、ほかの地域から風によって飛ばされて砂丘が形成されたそうだ。風によって飛ばされている過程で鉄分が付着するため、磁石を近づけると砂鉄が磁石にくっついた。ナミブ砂漠がオレンジ色になるのも鉄分の影響である。砂は本当に細かかったが、砂が柔らかく歩きにくいところもあれば、砂が固まっていて歩きやすいところもあった。

Hairy-footed Gerbil	Sociable Weaver の作る巣	Horned Adder(小さな蛇)
前日に仕掛けていた罠に引っ掛かっていた。	サバンナや砂漠地方に生息する 14 ㎝程度の鳥が作る巣。	(特徴)250mm～600 ㎜、夜行性、毒があり危険、

(特徴)尻尾が長い、前足短い後ろ足長い、茶色と白の毛、夜行性で目が大きい、暑い時に砂丘を掘って潜る	(特徴)長い根で常に水を吸収し、水を外に出さない、ダニと共生している	赤みがかった茶色と砂のようなグレーが混ざったような色、トカゲやネズミや鳥を尻尾で攻撃し捕食しその際獲物から水を得る
Ostrich	Dancing White Lady Spider	Namib Dune Gecko
(特徴)200 ㎝、雄は黒いからだでグレーの首そして白い羽でメスは茶色の羽のため見分けがつけやすい	(特徴)40 ㎜以上程度、夜行性、蜘蛛の巣を作らない、巣にふたをしめくって確認できる	(特徴)75 ㎜、夜行性、水掻きのある皮膚の薄い爬虫類、体や食物についた露から水分を得る
cape hare(ウサギ)の糞	Springbok	Smelly Shepherd's bush
		
体長 45～60 ㎝、体重 1.4～2.5 kgの耳の長い夜行性のウサギの糞 (特徴)饅頭型、硬い、匂いはほとんどしない	(特徴)ジャンプ力がある、メスもオスも角がある、夜行性、草食動物、何か月も水を飲まずに生きることが出来る	(特徴)1～3m、ハエをおびき寄せて繁殖するために花をつけてにおいを出す
Oryx	Racing Toktokkie	Flat Toktokkie

(特徴)高さ 1～2m、体重 200～240 kg、草食動物、サバンナや砂漠に生息する、群れで生活する、	(特徴)20 ㎜、ナミビアのみに生息する昆虫、地球上で最も速い昆虫の 1 つと言われている	(特徴)10 ㎜、体が丸く足が短い、捕食を避けるために死んだふりをすることもある

5-8 ライト・ポリューション

NaDEET は ida(International Dark-sky Association)の正式な認定団体であり、ナミブ砂漠はアフリカ大陸で初めて星空保護区として認定された地である。NaDEET で星空観察をした際、ホテルの放つライトが原因で目で見る事の出来る星が減ってしまうライトポリューション(＝光害)について学んだ。光害とは照明の設置方法や配光が不適切で景観や周辺環境への配慮が不十分なために起こる影響のことである。現在の東京では月と輝きの強い星しか見る事ができない。それは街頭や広告の明りなどに多くの光を使っていて東京の夜が明るいからであって、日本でも自然の豊かな田舎に行くと夜に利用する光がほとんどないため夜空を見るときれいな星空を見ることが出来る。星は一部を除けばそんなに強く光るものではないそうだ。地球から見える輝きの強い星から 1 等星、2 等星と順に分類し、肉眼で確認できるのは 6 等星までとされている。

1 等星と分類されている星は 21 個、2 等星は 67 個、3 等星は 190 個と強い光を放つ星の数は少なく、輝きが少なくなるにつれて数が増え、1 から 6 等星までの総数は 8600 個である。しかしこの 8,600 個は地球上から見える星の数であって私達のいる一定地点から見える星は半分の 4,300 個となる。また地平線ギリギリの星は見えにくいため実際に見える星は約 2,000 から 3,000 と言われている。そして人間の目は、明るい場所では入ってくる光を減らし、暗い場所では入ってくる光を増やす機能が備わっているため、東京のような明るい場所では輝きが鈍りより見ることが出来なくなってしまっている。また、光害は様々な事に悪影響を及ぼしていて、過剰な明るさや漏れた光はエネルギーの無駄になったり、まぶしさはドライバーにとっても運転しづらくなったり、植物や動物にも悪い影響を与えている。

5-9 NaDEET Urban Sustainability Center

スワコプムンドの NaDEET 事務所は、私たちが訪問した時未完成で、10 月の中旬に完成予定とのことだったが、特別に見学させてもらった。ドイツからインターンとして来た学生が事務所の案内と箇所ごとの説明をしてくれた。スワコプムンドの事務所は、「シンプルさ」を極めた自然に溶け込むスタイルの砂漠の NaDEET 施設とは違い、クリエイティブかつアーティスティックなデザインで様々な工夫が凝らしてある、「楽しさ」を極めた外見だ。見学していくにつれ、子どもが「体験」しながら、ゲーム感覚で楽しく学べる仕掛けがたくさんあることが見て取れた。

「シンプルで分かりやすい」仕掛けは NaDEET の特徴のうちのひとつ。一般的な家をモデルにデザインされているブース“Eco House”では、私たちが普段消費するエネルギーの量と、持続可能に工夫された場合のエネルギーの量が分かりやすく比較されていて、その差は一目瞭然。尚かつ、「すぐに目に入る」ところに表示されていたため、そのブースを周っている間中、常に意識させられる環境だった。私たちが普段消費しているエネルギー量を「自覚」すること、そしてそれを工夫してどこまで「最小限」にできるか、ということがこの“Eco House”ではすべて可視化されていた。

都会の「生活全般」のサステイナビリティを網羅したこの事務所では、「家」での生活に関わらず、移動手段、食べ物、生物多様性、コンポスト、ナミビアの独特な気候や資源、ナミビア共和国を取り巻く環境などのサステイナビリティについて幅広く学ぶことができるプログラム・仕掛けが用意されていた。

5-10 ハンズオン教材

ハンズオン教材とは実際に教材を手で触れ、ものづくりなどを通して体験的に学ぶためのリソースである。

以下は、スワコプムンドの Urban sastinablity Center で体験したハンズオン教材の一部である。

（1）ゴミ箱

イラストがゴミ箱の上に書いてあり、どのように分別すべきか書いてある。

- **黒色**：リサイクルできるもの（ビン・缶・ペットボトル等）
- **オレンジ**：コンポストに使えるもの（NaDEET の宿泊施設ではオレンジの皮・骨・調理した料理・調理されていない料理に分別されていた）
- **普通のゴミ箱**：リサイクルできないもの（使用済みティッシュ矢卵の殻等）

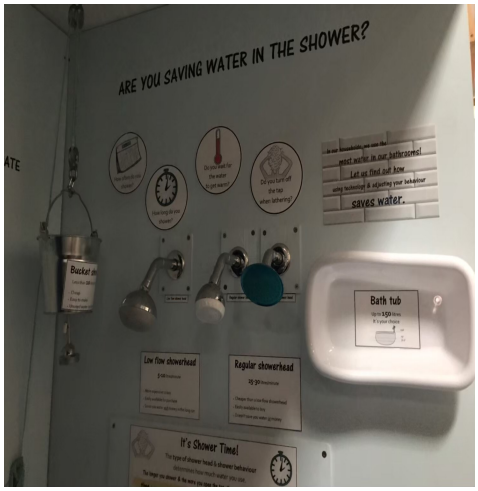
（2）電球

それぞれスイッチをつけ点灯すると、とどのくらい電力がかかっているのか表示される。
（以下は日本のデータで比較したものである）

- **白熱電球（左）**
  消費電力：54W
  電気代（1 年間日本で使用した場合）：4,860 円
  寿命（白熱色 60W を 1 日 10 時間使用）： 4.4 ヶ月
- **蛍光灯（中央）**
  消費電力：12W
  電気代（ 1 年間日本で使用した場合）：1,080 円
  寿命（白熱色 60W を 1 日 10 時間使用）： 44 ヶ月
- **LED（右）**
  消費電力：10W

電気代（1 年間日本で使用した場合）：900 円

寿命（白熱色 60W を 1 日 10 時間使用）： 133 ヶ月



（3）シャワー

1 分間でどれだけの水が消費されているかが表示されている。

・バケツシャワー（左から1番目）

NaDEET の宿泊施設で使用されている

10L 未満

・水圧の弱いシャワー（左から2番目）

5～10L

・標準の水圧のシャワー(左から 3･4 番目）

25～30L

ちなみにバスタブは満タンで使用すると 150L 水を消費する

(4)トイレ

古いトイレ

1990 年代以前のトイレは 1 回水を流すごとに約 10～20L もの水を消費している。

水流は縦方向(汚れが残りやすい・水量が多い)

現在のトイレ

1 回あたり 3.8～4.0L で洗浄することができる

水流は渦巻状（汚れつきにくい・水量が少なくても流せる）

×

(5)水道

歯磨きをする際に(約 2 分) 消費する水の量を 3 つのシチュエーションから比較する(マグカップ何杯分かで表されている)

・流しっぱなし→8 カップ分
・蛇口をこまめにひねる→4 カップ分
・コップのみを使う→ 1 カップ分

参考文献

Energy navi「LED 照明は白熱電球より総コストが10年で5倍もお得！？」
〈https://energy-navi.com/ledlightbulb/〉
(2019 年 11 月 18 日参照)
工藤設備「節水トイレに変えると月 3～5 千円もお得に！」
〈http://kudo-setsubi.jp/sessui-toilet/〉
(2019 年 11 月 18 日参照)

6.訪問場所の紹介

6-1 学校訪問

6-2 セスリムの渓谷(Sesrim Canyon)

6-3 セスリムの砂丘（Dune 45）

6-4 デッド・フレイ（Deadvlei）

6-5 サファリ体験

6-1 学校訪問

（1）St. Joseph’s Primary School の概要

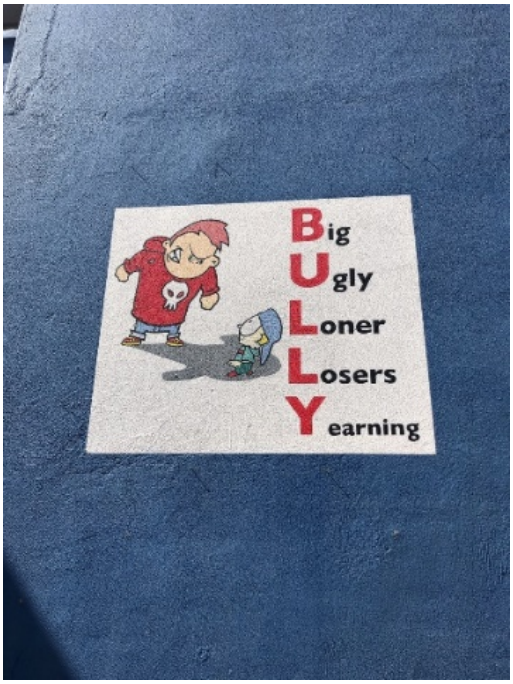
マルタヘーエにある、St. Joseph’s Primary School を訪問した。校舎は、カラフルな壁画や遊具があり、幼稚園生から中学生まで在籍している大きな学校だった。しかし、生徒の６～7 割が孤児でアルコール中毒や失踪してしまった親を持つ子どもだった。このような子どもたちのために、ここでは、朝食を用意している。さらに、学費を払うことが出来ない家庭は、無理に取り立てをしていない。また、この学校は、私立であるが、教員の給料は政府が支払っている。

（2）クラス訪問

まず、幼稚園児の教室から訪問し、人見知りをしている子どももいたが、比較的人懐っこい子どもが多い印象だった。訪問した際、紙を折って扇子のようなものを制作していた。小学校低学年ほどのクラスでは英語を学んでいた。先生が単語とその単語の絵が描かれた紙を見せ、子どもたちは、その単語を発音し、意味を動作で表していた。子どもたちは、みんな楽しそうに積極的に参加していた。最後に高学年のクラスに行き、「好きな教科は何ですか」と質問したところ、数学や技術など比較的理数系の教科が多かった。また、「将来の夢は何ですか」という質問に対しては、医者、パイロットなど各々の夢を語ってくれた。

←小学低学年、英語の授業

（3）いじめ対策



この学校でも日本と同様いじめがあり、幅広い年齢層がいるこの学校では、年上の生徒が年下の生徒をいじめてしまう傾向があるようだ。そのようないじめを撲滅するために、ブルーゾーンというキャンペーン実施している。学校に設置してある青いベンチでいじめられている人が、T シャツを着た、いじめの話を聞いてくれる担当の先生に相談をする。また、それに加えカウンセラーも滞在している。

←いじめ対策の為の壁画

(4)エイズ

エイズはアフリカ諸国で深刻な問題となっている病気の 1 つである。この学校では、誰もが目に入る壁にエイズについて可愛くペイントしてあった。幼児から中学生まで在籍しているので、幼いうちからエイズについて知り、予防することが出来る。

↑エイズについての看板

（5）交流

↑St. Joseph's Primary School の生徒によるダンスと歌

学校を見学した後、感謝の気持ちを込めて、私たち学生から SMAP の歌と踊りを、それから永田先生と水島先生からビートルズの歌のプレゼントをした。その後、お返しとして、この学校の生徒と教員から楽器を交えた、迫力のある歌を披露してもらった。また、最後には、全員で手をつなぎお祈りの時間をした。国境を越え、歌やダンスそして、お祈りによって、1 つになれ、有意義な時間を過ごすことが出来た。

6-2 セスリムの渓谷(Sesrim Canyon)

セスリムの渓谷はセスリムの砂丘（No.45）の近くにある、アフリカの大地を感じることができる場所であった。ここはつい最近まで川が流れていた場所で、現在では川の水によって削られた堆積岩が連なっている。足を踏み入れると、映画のセットのような場所が広がっていた。渓谷は、人工的な整備がされておらず、不安定な岩の上を歩いたり、崖をよじ登ったりするような場所があった。自然がつくり出した道を進んでいくと、約 30m ある岸壁が見え圧倒された。岩の上を見てみると、大きな鳥の巣があり、目を凝らすと岩と似たような色をした鳥がいた。日よけになるような場所を探し、器用に巣作りをする鳥に強い生命力を感じた。今回は見ることができなかったが、未だに川が残っている部分があり、鳥や小さな動物たちがここまで水を飲みに来ることがあるそうだ。

6-3 セスリムの砂丘（No.45）

今までに見たことがない光景が広がっていた。絵や写真、言葉では表せないような大地が広がっており、思わず言葉を失った。砂漠に訪れる前に、永田先生が「NaDEET とまた違った砂漠で、想像を絶するものだと思います。」とおっしゃっていたが、まさにその通りだった。赤でもなく、茶でもなくオレンジでもない色の砂漠が永遠に広がっており、違う惑星に来てしまったかのような感覚に陥った。砂に触ってみると、とても粒子が細かく、服に砂がついたとしても、手で払えば簡単に落ちるようなものだった。しかし感動したと同時に、メンバーが近くにいるのにもかかわらず、急な孤独感を感じた。砂漠には音や匂い、植物がなく、見渡せば広大な大地が広がっており、何とも言えない気持ちになった。夕暮れ時にはサンセットを見て、夕日が砂漠を照らしとても美しい光景が広がっており、みんなで砂丘に座って日が落ちるのを見ていた。全員が一人の時間を大切にすることができたいい時間だったと思う。また、毎晩行う振り返りの時間（ラップアップ）で「なぜ砂漠は美しいのか？」というテーマで話し合いを行った。そこでは各々の意見を交換し、深い学びとなった。

6-4 デッド・フレイ（Deadvlei）

デッド・フレイは絵画のような景色を見る事が出来る事で有名な場所だ。現地の言葉で「死の沼」という意味でもあるデットフレイは、1000 年前に沼地が干からび枯れたアカシアの木々がそのままの姿で残っている場所だ。現在まで木々が立ち続けていられるのは、微生物によって木々が分解されないためである。また地面は沼の水が全て干しあがってしまったため、白いままなのだ。

このデッド・フレイでは、朝日が昇って木々に光が当たる限られた時間のみ、絵画のような景色を見る事が出来るのだ。そのため私たちは朝早くにセスリムのキャンプ場を出発し、7 時に国立公園のゲート到着を目指した。ゲートからはバスに乗ることが出来ないので、四駆に乗り換えてデッド・フレイに向かう必要があった。しかし砂丘に到着して目の前にデッド・フレイの景色が広がっているわけではなく、四駆を降りてから更に約 1 キロ歩いた。そして 15 分ほど歩くと、突然デッド・フレイの景色が目の前に現れたのだ。そこには枯れた木々が何本も立っていて、目にしたときはその異様な雰囲気に言葉が出なかった事を覚えている。また砂漠にいるはずなのに、眼下に木々が立っている景色は不思議だった。そして絵画のような景色をカメラに収めようと、たくさんのカメラマンが真剣にシャッターチャンスを狙っていたのも印象的である。

砂漠を下り近くでその木々たちを見ると、遠くからでは分からなかった木々の腐り方をまじまじと見ることが出来た。500 年もの間、一切の水を吸収していない様子がよく分かった。しかしその木々を見ているとどうして死んでいるのに立ち続けていられるのだろう、という疑問が生まれ、死んでいる木々から謎の生命力を感じた。そしてこの木々たちが、何十年もの間沢山の人々を魅了してきているのだと考えると、この木々たちにもある種の“美”が備わっているのではないかと感じた。

6-5　サファリ体験

私たちが訪れた Erindi のサファリでは、バスの中から至近距離で、野生のサファリの動物を見ることができた。自然保護区といっても動物園にいる動物とは違い、あくまで野生動物なので、残念ながらチーターやライオンなどの肉食動物は今回発見できなかった。しかし、キリン、シマウマ、ゾウ、スプリングボックス、サイ、ダチョウなどの草食動物、さらに、その親子や家族まで、様々な動物を生で見ることができた。今回のスタディツアーのバス運転手兼ガイドを務めてくださったティナーシェさんが、それぞれの動物の特徴や性格をその都度教えてくれた。その中でも「ゾウは、いちばん平和的な動物だが、音を立てることや、彼らのテリトリーを侵害すると怒ってとても狂暴になる」という説明を受けた時、みんなが一斉に静まり返って、彼ら（ゾウ）をリスペクトしながら優しく見学した。サファリの動物たちはこちらを警戒してじっと見つめてはいるものの、彼らの表情はとても平和で、優雅に、ゆっくりと移動していた。その姿を見て「あの動物たちのように、何にも縛られずに、優雅にゆっくり生きたい」という声も学生から上がり、みんながそれに同調した。見学の後半にはサンセットとキリンを、一枚の絵のように一緒に見ることができ、砂漠に沈んでいく綺麗なオレンジ色の夕日とキリンのシルエットがとても美しく、みんながシャッターをきった。最後には湖の周りに集まる動物たちをサンセットと一緒に楽しみ、100%ナチュラルな光景を自分たちの目にしっかりと焼き付けて、キャンプ地への帰路に就いた。

7. T シャツ販売を通した寄付

私たちは NaDEET オリジナルの T シャツを持ち帰り、文化祭で販売した後に売上金を 寄付する活動を行なった。この活動では、T シャツ一枚 2,000 円で売ることによって、 現地の子ども一人が NaDEET で環境教育を受けることができる。この活動を行うために私 たちは、NaDEET の施設で話し合いを重ねた。

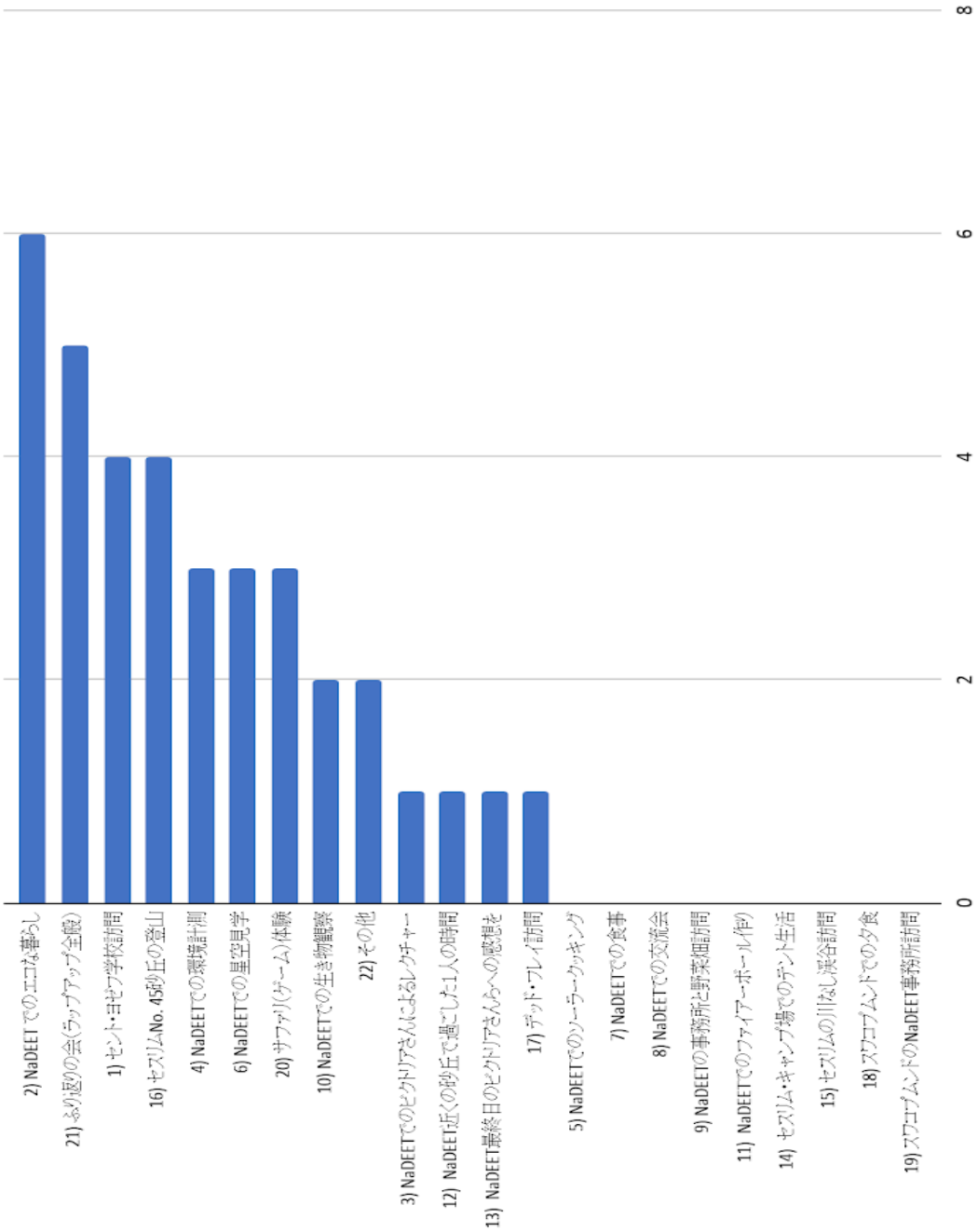
私たちは、NaDEET に T シャツや帽子、ポストカードなどのグッズがあることを知った。そこで、T シャツをたくさん買い、日本に持ち帰って T シャツを売ることでたくさんの人たちにもっと NaDEET の活動に興味を持ってもらおうと考えた。T シャツを買って募金をすることで日本とナミブランドを繋げる架け橋になろうと話し合いが進んでいった。しかし、T シャツを買うという行為を環境教育について学んだ人がしても良い行動なのかと疑問を持つ人たちがいた。T シャツ 1 枚を作るのに 3.4kg の CO_2が排出される。その排出される CO_2を少なくするための学びをしてきたのにも関わらず 50 枚ほどの T シャツを買っても良いのかということが議題に上がった。50 枚ほどの T シャツを持って帰れば、確実に現地の子供たち約 50人が NaDEET の環境問題に取り組むことができ、ナミビア共和国の教育に僅かではあるが貢献することができる。しかし、一方で T シャツを持って帰ることで 170kg の CO_2が排出されてしまう。この究極な矛盾に私たちはどこで折り合いをつけるべきなのか話し合いが難航した。

結局私たちは、45 枚の T シャツを持ち帰る選択をした※。なぜなら、T シャツを買うことで環境教育を受ける子供達が増えるのならば、たとえ T シャツによって排出してしまう CO_2があったとしてもナミビア共和国を変えることができる方を優先しようと考えたからだ。今回私たちは、地球に犠牲になってもらった。その分、私たちが集めた資金でナミビア共和国の子ども達が環境について学び、CO_2を少ない排出で抑える暮らしが身についてくれたら T シャツを買ったことは間違いでなかったと証明できる。また、T シャツを買ってくれた人たちが、T シャツを見るたびに CO_2の排出のこと、地球のことを考えてくれているのならば、私たちはハチドリの役目を果たせたと言えると考える。

※ T シャツは聖心祭が SDGs 関連のイベントで販売し、2019 年 12 月現在、40 枚以上が売れており、40 人以上のナミビア共和国の子ども達が環境教育を受けられる予定である。

8. アンケート結果

1. スタディツアーで最も印象深かったのは次のうちどれですか。3つだけ選んで下さい。

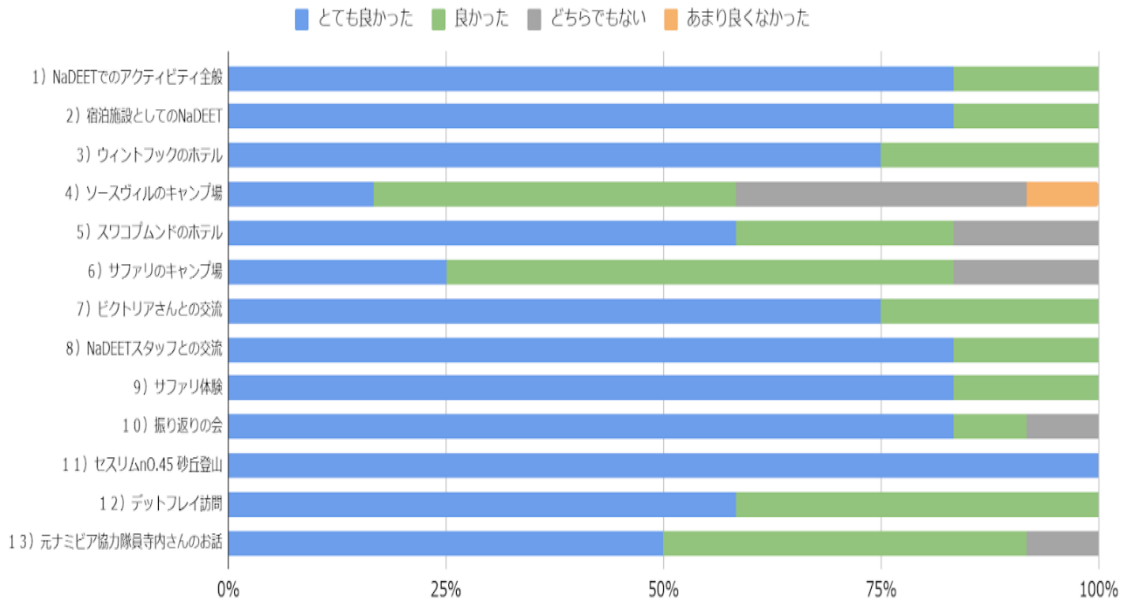


20）その他

・NaDEET でのハウスメイトと過ごしたこと

・メンバーや NaDEET それからガイドさんたちと過ごした日常生活

2. 次の体験したことについてそれぞれ評価してください。



3. スタディツアーで最も印象深かった体験は何でしたか。1つだけ、その理由と共に記して下さい。

<u>セスリム No.45</u>

・一番地球が大きく見えて、地球に守られているような、自然に見下されているような複雑な気持ちになったから。

・生まれてきて初めて砂漠を自分の目でみた。生物も存在しない、匂いもない、ただ風だけが存在する不思議な空間が今でも忘れられないから。

・音も匂いもない不思議な空間で見た日の入りはなんとも言えない気持ちになった。

<u>バケツシャワー</u>

・毎日シャワーをするたびに NaDEET でのバケツシャワーを思い出して、私は今どれだけの水を使っているのだろうと考えるようになった。また、少しでも水を無駄にしないようにと意識するようになった。

<u>水とエネルギーの測量</u>

・今までの暮らしでどれだけ使っていたかもわかっておらず、さらに自分たちが意識して水やエネルギーを使うことで結果が変わり、一人一人の小さな行動にも意味があることが初めて実感できた。

<u>星空観察</u>

・あんなに美しい星を観られる場所はもの地球上でも少ないと思うから。

振り返りの会（ラップアップ）

・みんなの心が、いちばんきれいで、いちばん美しかったから。自然といういちばん偉大な先生を通して、彼女たちが学んだこと、受け取ったことから私自身が学んだことが本当に多く、自然―人―学び―人―自然・・・という学びのサイクルを感じることが出来た。

サファリ体験

・あれほど自分の存在が異質に感じたことがなく、「生きている」と、いうような感覚をしっかり感じたことがなかったため、とても印象深かった。特に、ゾウの「ズシン、ズシン、」という足音は今までもこれからもなかなか経験できない貴重な体験だった。

NaDEET でのエコな暮らし

・一見とても大変で面倒臭そうに見える NaDEET での暮らしは、実は意外と快適だと思えたから。そしてその中で人間は地球に負担を与えないこの最低限なライフスタイルでも充分暮らすことが出来るのだと実感することが出来たから。

トイレ３回分の水で一日生活したこと

・日が経つにつれ、自然、地球と一体化している気がして自分自身も気持ちが良かったこと NaDEET を出て違う宿泊場所になった時に感じた。NaDEET の生活は、今思い出しても過ごしやすく、便利の生活ではなかったが、また NaDEET の生活をしたいと頻繁に思っている。

妥協点を見つけること

・妥協点を見つけながら、地球や他の生き物に対する思いやりを持った生き方をしていくことを学んだ。また、完璧を求めるのではなく、たとえ些細なことでも自分の生活の中で出来ることをコツコツとしていくことが大切なだと、Viktoria さんから学んだから。

NaDEET

・虫や動物、植物の観察、星空、夕日、朝日を見て、地球に生きていて人間だけでなく地球に住むすべての生き物と共存していると感じた。

4. スタディツアーの間に普段よりも深く考えたことがあれば、教えて下さい。

・私たちがいかにいつも贅沢で必要以上のものを使って生活しているか、離れている家族のこと、日本のことを考えた。

・携帯電話はとても便利で今の生活にはなくてはならないものだけれども、デジタルデトックスをしてみて携帯電話がないとなんてストレスフリーで快適なのかと感じた。スタディツアーが始まった時には Wi-Fi がなくて生きていけるかなと思っていたけれど、スワコプムンドのホテルで Wi-Fi につないだ時に通知がたくさん溜まっているのをみてうんざりしたし、嫌だと思った。もしかしたら携帯電話がないほうが人間は無意味に携帯をいじっている時間を別のことに使えて、もっと自分と向き合えるようになり幸せなのかもしれないと感じた。

・自分のこれからの生活の仕方について。家のコンセントを抜いたり、ビニール袋を減らしたり、電気を LED に変えたり、少しの事が大きな力になることを知り、自分には普段の生活に置いて地球に対してなにができるかを考えるようになった。
・普段自分はこんなにも無駄な水を使用していたということ、こんなにもエネルギーを使っていたということ。

・自然との共生について、チームで活動するということ、また自分自身について。大自然の中に抱かれると複雑なしがらみから解かれるような気分を感じた。日本での生活をよく考え、比較することやどうしたら環境に良いかを考えた。

・中国や先進国によるアフリカ開発・援助について。この開発・援助でアフリカのインフラが整い、経済も潤うことで人々の生活水準も向上するとは思う。しかし、本当にそれで良いのだろうかと立ち止まって考えた。私たちのように、いろいろな事柄に縛られ、心が貧しくなってしまうのではないか。確かにアフリカの自然は過酷だが、本来の自然の美しさとはそういうものであると思う。幸いにも、地球上の中でアフリカは未だにそのピュアな美しさをもっている。それを人間の手でコントロールしようと試みることは、正しいのだろうか。

・SDGs の Development の定義について。技術優先主義的な私たちの開発・発展の結果が、今日の危機的な地球に繋がってしまっているのだから、これ以上の「開発」は必要ないように思う。たとえそれが「持続可能」であっても、「開発」をベースにした根本的な考え方は、また同じような結果を生み出してしまうのではないかと懸念した。何を「開発」とするかによって考え方は異なるが、少なくとも、「今の社会または社会システム」を持続可能にし、発展させなければいけないと感じる。
・動植物や人、地球・宇宙、自分などにとっての幸せについて、生命の循環や相互作用について、日本について、 物事の本質について。

・常に学び続ける、ということ。スタディーツアーでは様々な方からお話を伺い、学びを深める事が多かったが、それ以外にも自ら体験する事で自分なりの考えが生まれたことや、皆さんの意見を聞く事で新しい考えが芽生えた。このようにふとしたところで気づきや学びがあり、この感覚は日本での普段の生活が当たり前になってしまっていて薄れていたと感じた。また先輩方の物事の捉え方にとても良い影響を受けた。自分だったら決して考えつくことのない観点から物事を捉えている姿はとても刺激的だった。

・満点の星空と夜も安全で便利な世界のどっちがいいか、私は何のためにサスティナビリティな生活をしていかなくてはならないのか考えたがまだ答えが出ない。
・共存。人間同士の共存はもちろん、動物とも共生しなければならないとサファリを通して学んだ。そのためには、環境問題に目を向けなければならない、しかし、NaDEET での生活や学んだことをそのままに本で行うことは難しい。その妥協点をどこにするか、また、Viktoria さんがおっしゃっていた「君たちはハチドリだよ」について深く考えさせられた。

・私たちが目指している未来（SDGs の実現）と現状とのギャップ。

・日本での生活をよく考え、比較しどうしたら環境に良いかを考えた。

5. スタディツアーに参加して自分は変わったと思いますか。「はい」と答えた方は変わったのか、記して下さい。
①はい 11 名　②いいえ 0名 ③どちらでもない 0名

・「持続可能性や気候変動のために」と、聞くと身構えてしまう自分がいたが、今回のスタディツアーを通して「自分なりのアクション」の妥協点を見つけることができるような考え方を身につけることができたように感じる。また、体験したことをただ「すごい」と、受容し考えるだけではなく、批判的に物事を捉え、葛藤を感じたり考えたりするようになった。

・私は大学に入ってから、高校生の頃よりも勉強に対する姿勢が低くなっていたが、この 1 週間様々な状況下で学びを深めたことにより学びの場は、様々な所にあるのだと実感しました。そして自分の少しでも興味のある事を教科書とノート以外のものから、学ぶことが出来て新しい考えをどんどん増やしていくことが出来るのが大学での学びの醍醐味なのだと自分なりに解釈出来た。普段の生活での気づきを学びに取り入れることが出来るのはとても楽しいことだと感じた。

・水を出しすぎたときや、水洗トイレを使うたびに NaDEET での生活が頭をよぎる。また 1 人の時間を大切にできるようになった気がする。

・日本にいるとなかなか感じることが出来ない、自然の力やその広大な自然が私たち人間によって壊されているということをサファリなど経験することにより、考えることが出来た。アフリカに行くと、人間というのは本当に小さい生き物だと思うと同時に、その小さい人間が多くのエネルギーを使う怖さを学んだ。また時折、一人の時間があったことにより、自分と向き合うこと、自分を見つめ直すことが出来た。

・24 時間地球の為、未来のために考える時間が設けられ、かつその考えや思いを仲間に共有することができる場所を与えてくれた事は大変良い経験だった。

・環境問題について、少しでも考える機会が増えたと感じる。トイレを流すときやシャワーを浴びて いるときに NaDEET を思い出し、水筒やお弁当をもっと活用するようになると思った。

・物事を深く考えるようになった。また以前よりも自分と向き合う時間が増えた。

・帰国した今、出しっぱなしの水を見るたびに、バイトで食料を廃棄する度に胸が自然と痛む自分がいる。エネルギーについて日頃から自然と考えるようになった。

・ナミビア共和国に行く前まではどのような素晴らしいお話を聞いても、それだけでは世界は変わらないと持っていたが、NaDEET の経験から、自分だけでも行動することでハミングバードになれるということを学び、小さなことでも行動し続けようと思った。

・今まで何も考えずに使ってきたシャワーを使うたびにバケツシャワーを思い出し、使いすぎていることを感じ必要のない時は止めるようになった。

・ナミビアから帰国して、もうスタディツアー以前の自分には戻れない、戻りたくないと確信した。自分の家を見渡して、何ができるのか、どこをどう工夫できるか、どうエネルギーを最小限にするか、観察し始めた。この気持ちを大切に持ち続けたい。

6. スタディツアーに参加して最も大変だった点について1つだけ書いて下さい。

・語学。英語が得意でないため、みんなと比べて理解する速度が遅く、質問を考えたり内容を自分に落とし込んだりするのに時間がかかったこと。

・理想と現実のギャップに戸惑った。（SDGs のすべての項目を実現させたいが実際には、それは非常に困難なことであるし、実際問題自分たちが暮らす都市では問題が多すぎるため。）
・ナミビア共和国での生活に適応すること。

・想像していたよりも遥かに快適に 1 週間を過ごす事が出来たが、1 つ挙げるとするならば、NaDEET でエコな暮らしを体験した後に都会のホテルで普段の暮らしを目の当たりにした時に心がとてもモヤモヤして複雑な気持ちになった。

・ラップアップで毎回みんながすごく良いことを言うので、私はみんなの様に良いことを言えない、と 1 日の最後に行ったラップアップを少しプレッシャーに感じていた。

・あまりにも NaDEET での生活がエネルギーを使わなかったので、そのあとのホテルやキャンプでのエネルギーの使用に抵抗があった。その葛藤とどう向き合うかが正直つらかったが、そのようなことを考えられるような人に成長できたと思った。

・あまり大変だとは思わなかったが、どこにいっても砂だらけなので、コンタクトの痛みが激しく、1day のものがいいと感じ、目薬も持参するべきだと思った。

・髪が長いので NaDEET でのバケツシャワーがプレッシャーだった。

・セスリムキャンプ場でのテント生活は、ただ歩いているだけで、口の中はじゃりじゃり、髪の毛も砂だらけで、目も開けられないほどであった。

・気候の関係で肌がすごく乾燥したこと。

・砂嵐の中でテントをたたんだこと。

・適応すること。Viktoria さんが、“Adaptation is very important to live especially in desert.”（「特に砂漠で暮らすには適応がとても重要なのです。」）と言っていたが、あらゆる自然の「大切さ」を真に理解できていなかった私にとって、砂漠に適応するのは簡単なことではなかった。（バケツシャワー、食事、気候・・・など。砂で肌と髪がゴワゴワになり、いっそのこと坊主頭にしたいと何度も思った。）

7. スタディツアーの改善すべき点があれば、自由に書いて下さい。

・一人になれる時間がもう少し欲しかった。

・ラップアップ（振り返りの時間）を早めにして、寝る時間をもう少し確保したかった。

・NaDEET の方々のお土産について NaDEET で学んだことを活かせていないものが多かったと思った。聖心女子大学として行っているため、お土産を用意するならば事前にみんなで予算を決め、どのようなものを渡すのか相談したかった。

・当初訪れる予定だったネルソン・マンデラさんが収容されていた場所は応募した理由の一つだったため、行けなくて残念だった。今回アフリカという地で、飛行機代が高いので、もう少し現地での時間を増やし、いろいろな場所に行ってみたかった。応募書類に記載する値段等の問題もあるので、締め切りを早くし、相談をするのもよいかもしれない。

8. 今回のスタディツアーを通して自分の英語力は向上したと思いますか。理由について簡単に説明してください。

①はい 5名　②いいえ 0名　③どちらでもない 6名

①はい

・Viktoria さんの英語が綺麗だったことも大きいですが、英語でのレクチャーがあまりしんどく感じなかったから。

・旅の初日に比べいい意味で羞恥心が無くなったため、英語で会話をすることや聞き取ること力が以前よりついたと思う。

・向上したかは具体的にはわからないけれど、出発日と比べたら慣れた気がした。また英語を頑張りたいと思った。

・Viktoria さんのお話などをはじめ、常に耳が英語に触れている環境だったため、行く前よりも英語に慣れたと感じた。

・日本語でしか言い表せないこともあったが、英語でしか浮かんでこない表現の方が多かった。そちらのほうが、自分が感じたことをそのまま新鮮のうちに文章として保存できた気がして、なんだか嬉しかった。

③どちらとも言えない

・Viktoria さんのお話を自分の力で理解しようと努力したが、やはり永田先生の通訳がなければ完璧に理解することは難しかった。特に専門用語は聞き取ることも難しく、事前に少し勉強しておけば良かったと思った。

・リスニングやスピーキングの能力が向上したとは思えない。NaDEET スタッフやティナーシェやマシューと思うように会話ができなかったことや、英語ができたらもっと吸収できることが多かったと感じているため、英語力を向上させたいと思う気持ちが強くなった。

・Viktoria さんのレクチャーやガイドさんの話を頑張って聞き取ろうとし、日が経つにつれ少しずつではあるが聞き取れるようにはなったが、永田先生が通訳してくれることに甘えていた場面も多くあった。

・みんなと行動することが多かったので、英語を話すことがあまりなかった。また、ガイドさんたちと話す程度には、少し会話ができるのであまり問題がなかった。

・ナミビア共和国の方々の英語を聞き取るのが自分にとって困難であった。

・聞き取れないことや、言いたいことを話すことができなかったから。

・リスニング力はものすごく上がったと思うが、スピーキング力が上がったかどうかはあまりわからない。

9. 今後のスタディツアーについて「こうだったらよい」と思うアイデアや工夫があれば記して下さい。

・以前のスタディツアー参加者から荷造りシェアがあったら役立つと思った。

・参加者全員でプライベートな話をする機会がもっとあれば良いと思った。

・事前準備や渡航前に仲を深めることによって、知識が増えることはもちろん、互いの性格を理解し、現地に行ってもすぐ仲が深まり、より深い学びができたと思う。

・もう少し長く滞在したかった。

・もう少しナミビア共和国ならではの食に触れてみたかった。
・遠くに行く際は今回の参加人数ぐらいがちょうどいいと思う。これより多くては仲を深めるのが難しかったと思う。

・NaDEET やスタディツアーで学んだことをどう「落とし込むか」について（プログラムの一環として）話し合う時間があったらさらに良かったと感じた。

10. 今回のスタディツアーについて思うところ何でも自由に記して下さい。

・新たな出会いとの連続で、頭が追いつかなくなるくらい様々なことを感じ、考えることができたスタディツアーだった。ナミビアという土地から多くのことを学び、そこから宇宙へ発展して考えることができたのは、NaDEET での体験が大きく、特別な出会いとなった。また、サファリでのテント泊は、野生の恐さや楽しさを感じることが出来、少しタイムトラベルをしたような、フィクションの世界にいるような体験が出来た。普段の生活とは異質な生活を過ごしたことで、感受性が豊かになったように思う。地球上だけではなく、宇宙からも助けられて生きているという気持ちを、これからの生活でも大切に持って過ごしていきたい。

・アフリカは身近な人でも訪れたことがある人はほとんどいなかったので、初めは不安が大きかったが、事前に寺内さん等のお話を聞きインターネットには書いていないようなナミビア共和国の貴重な情報を得る事が出来て良かった。

・自分の成長や価値観の変容を感じることが出来た本当に意義深い 10 日間だった。

・個人的な考えだが、NaDEET を訪れたはじめてのアジア人が私達だったと聞き、凄いことで光栄な事だと思った。なので、ここで得たことを日本にいる人たちに共有していくのが私たちの使命でもあると感じた。

・ただ観光するだけでは絶対にできなかった貴重な経験が出来た。ナミビアで経験したこと、感じたことを 1 ずつ振り返り、ナミビア共和国、NaDEET に行ったことが無駄にならないよう小さなことでも意味のあるアクションをしていきたい。

・私にとって、ラップアップの時間がとても重要で、正直早く寝たいなと思った日もあったが、今考えると結構記憶に残っている。自分では気がつくことが出来ない視点から物事を考えている人が多かったので、視野が広がった気がした。

・言葉では言い表せないほどの素晴らしすぎるスタディツアーだった。

・今回初めて、スタディーツアーに参加させて頂いたが、人生で初めてのことだらけで、頭を整理することで精一杯で気持ちが追いつかないこともあった。地球を大事に、自分のことも大事にしていこうと強く思えた。また私たちの子孫のために世界に訴えかけなければならないことがあることを知った。

・間違いなく行ってよかった！ただ 10 日間があっという間に過ぎて、物足りなかった。もう少し滞在したかったときっと全員思っていると思う。

・私はこのスタディーツアーに参加するまで、日本よりも社会的技術、政治が発展しているとは、言い難いこの国に教えてもらうことがあるのだろうかと疑っていた。しかし、このスタディーツアーを通して私は自分の生き方を考えさせられた。学年を超えて一つの家族のような存在の仲間に出会えたことに感謝。

・初めてのアフリカ大陸に足を降ろすということで、最初はどんな旅になるか不安もあったが、最終的には絶対に日本ではできない経験をさせて頂き、このような機会を用意してくださった先生方、両親またお世話になったすべての方々に感謝したい。

・ものすごく良い経験になった。どうしても 1 日の中で忘れてしまうことがあるからラップアップの時間がとても貴重だった。みんなの考えを知ることもすごく楽しかった。

・多少金額が上がって、滞在時間が伸びても、ヒンバ族に会いに行きたかった。昔からの伝統を忠実に守る先住民や部族は、自然に対する考え方・価値観が私たちとは１８０度異なる故に、良い先生になり、それだけ学ぶことが多かったのではと感じた。また、今回の NaDEET プログラムは rural であり、学んだことを urban に暮らす私たちの生活に落とし込むには、かなりのギャップがあると感じる。それをどう埋めていくか妥協点を見つけていくか、最後の 1 日でも 2 日でも、少し学びをシェアしてみんなで模索したかったと感じた。

11. ナミビアのイメージを一言で表して下さい。

出発前	帰国後
ヒトと自然が共存する場所	本質（本来の姿）を感じられる場所

大自然もあるけど以外と都会	地球の声が聞こえる場所
アフリカの中でも治安が良い国	未知
砂漠、自然	良くも悪くも大自然を感じさせられる場所
オレンジ色、動物と自然、様々な民族	原点に戻れる国
景色が壮大で綺麗	アナザースカイ
砂漠	共存
砂漠	砂
先住民がいそう	自然が豊かで美しい
シビアで壮大な自然、共存	過酷な自然の美しさの中で、「生」が「死」に、「死」が「生」になる場所
貧困、おくれている国	母なる大地
砂漠	価値観が変わった場所

12. あなたにとってサスティナビリティ（持続可能性）とは何ですか？　一文で表して下さい。

・いのちを尊重すること

・地球に生かされていると思うこと

・すべての命を大切に思うこと

・誰もが自分がいる場所（地球、国、都市）を守り、聞こえない声に耳を傾けること

・今の幸せや感動を感じる瞬間が将来もずっと同じであり続けること。

・愛し合い、思い合うこと

・無理なくみんなが続けられること

・次の世代の未来を創ること

・ 多くの人が地球について知識を持つこと

・地球から奪うのではなく、何を「与えられるか」を考えること

・すべての生き物を尊重すること

・学び続けること

9. 感想

ＹＮ「スタディツアーに参加して」

ＮＵ「アナザースカイ」

ＹＹ「初めて見る景色の中で」

ＡＹ「憧れから学んだこと」

ＫＩ「地球を共有する一員として」

ＭＨ「美しい地球を守ろう」

ＲＯ「つながり」

ＨＡ「Living together」

ＫＮ「共に生きる」

ＲＩ「Learning Cycle through the Nature」

ＮＴ「ESD の実践と学び」

ＨＭ「ナミビアスタディツアーを終えて」

木戸啓絵先生「自然の力と美しさ」

水島尚喜先生「このＡＩ時代に「始原」に接することの意味合い- ナミビアスタディツアーにアテンドして-」

スタディツアーに参加して

基礎課程1年　ＹＮ

ナミビア共和国で過ごした 10 日間は、地球について深く考え、五感を最大限に活用して過ごした日々でした。そして現地で出会った方々、先生方、メンバーの皆さん、そして何よりもナミビア共和国の自然に沢山の事を教えて頂き、多くの新しい思考に巡り会う事が出来たと思います。

初めはアフリカの地と SDGs の繋がりがどういったものなのか、なかなか想像が付きませんでした。しかしメインプログラムであった NaDEET での滞在によって SDGs のみならず ESD とは何かを身をもって知る事が出来たと思います。地球環境を守っていくには、今後どのように環境保護活動をしていくかだけではなく、これから未来を歩んでゆく子供たちのために教育を行っていく事がどれだけ意味のあるものなのかを知りました。このように考える事が出来たのは、NaDEET での 4 日間、限られた量の水と電力で過ごす中で、不便さよりも快適さを感じ、また砂漠の動植物の観察プログラムで自然のライフサイクルを学んだからです。人間は限られたエネルギーの中でも十分過ごしていくことが出来て、更にそれは地球に与える負担が非常に少なく済むため、この事を世界中の人々、特に子供たちが学ぶ事で未来に繋がりいくのだと考えました。そして私自身も今までいかにエネルギーに頼って生活していたのか、そしてエネルギーが供給されている生活が当たり前だと思ってしまっていたと痛感しました。しかし NaDEET の後に滞在したホテルで、シャワーを好きなだけ浴びる事が出来て、部屋の電気も付けることが出来る暮らしに違和感を覚え、あれは 1 つの自分の価値観が変容した出来事だったと思います。このような 1 つ 1 つの小さな変容が自分の価値観や意識を変えていくのだと実感することが出来ました。

また移動の道中やサファリで出会った動物達の力強い目つきが今でも忘れられません。ナミビア共和国の動物達は、日本の動物園で見る動物達とは異なる目つきをしていました。力強い目つきで私たち観光客を見つめてくる彼らの視線からは、本物の“生”を感じ、広い大地で自然と共存しながら精一杯生きている様子に心を動かされました。私たち人間は、地球に暮らす中心人物は人間だと勘違いしがちですか、全くそんな事はなく動物達も同じ地球で生きている仲間であるにも関わらず、人間のエゴで地球を壊している事の恐ろしさを痛感しました。

そしてこの 10 日間で環境のみならず、先進国と発展途上国の関係、ナミビアのダイヤモンド採掘から分かる経済の仕組みなども学び、世界は良くも悪くも繋がっているのだと思いました。まだまだ自分の未熟な思考力や知識では、理解しきれない部分もあり、これから続いていく大学生活でしっかりと学びを深め自分の意見を持ちたいと強く誓いました。ナミビア共和国でしか見ることの出来ない素晴らしい景色を見て、自然の声を聞き、変わり続ける自

然の匂いを感じながら砂漠の地で過ごした 10 日間をただの思い出にせずに、人生の糧としていきたいです。

アナザースカイ

英語英文学科2年　ＮＵ

私は来年に成人式を控え、着々と大人に近づいていることを感じる一方で、まだまだ中身が伴っていない自分に戸惑いを感じていました。「これに参加したら何か変われるかな」という期待を胸に参加したこのスタディツアーでは、予想をはるかに上回るほどのかけがえのない時間を過ごすことが出来ました。そしてたくさんのことを学び吸収したことで、以前とは物事の見方が変わり視野が広がった成長した新しい自分に出会えました。

このスタディツアーでは「自己変容」という言葉が大きなキーワードで、その中でも私が最も感じた自己変容は水への考え方です。NaDEET ではチーム対抗で一日に使用した水分量を測定して、一日でトイレを三回流したほどの水分量で生活をしていました。その生活は本当に苦しく、（はやくシャワーを思い切り浴びたい）とか（こんな生活は嫌だ）と思っていました。しかし、いざホテルに行ってシャワーを浴びても体はさっぱりしたけれど、心は晴れるどころか、私はいま何リットルの水を作ったのだろうと悲しく複雑な気持ちになりました。日本に帰ってきてからもシャワーを浴びる度にバケツシャワーのことを思い出します。どれだけ水が貴重であるか身をもって体感できたからこそ、わたしは水を無駄にしないように行動を変えることができました。さらにもう一つ自己変容を感じたことがあります。ナミビア共和国では異常干ばつ宣言が国から出されるほど干ばつが大きな問題となっています。私自身、サファリに行った際に思っていたよりも動物が少ないなと感じたのですが、干ばつによって動物の数が減っているのだとガイドさんが教えてくれました。日本と遠く離れたナミビア共和国で、先進国の生活による弊害を受けている発展途上国の現状を肌で感じ、私もその加害者のうちの一人であることがとてもショックでした。私にとって地球温暖化がいかに深刻な問題であるかということを目でみて感じ、体感した瞬間でした。ナミビア共和国から帰

ってきてからも、日本で大型台風や異常気象の大きな被害が出ていることに対して地球温暖化が他人事ではなく、“私たち”の問題だと意識したし、地球が身勝手な私たち人間に怒っているのだと感じました。Marina から sustainable とは母なる地球に優しくすることだと教えてもらったけれど、まさに私たちに必要なことは未来のことを考えて一人一人が自分で出来る範囲内の sustainable life を意識して生活していくことだと思います。私たちは地球温暖化の問題をどうにかしなくてはならないことはわかっているはずなのに、ついつい他人事だと考えてしまいます。しかし、ハチドリのひとしずくのように先進国の人々がいい妥協点を見つけて自分に出来ることからはじめていけばいい方向に変わるのではないかと思います。

私はこのスタディツアーに参加して間違いなく人生観が変わりました。この経験を活かして、これからは永田先生がおっしゃっていたように自分の根となる identity を確率して、翼となるスキルや知識を身に着けていきたいです。最後に 11 人のメンバーには本当に感謝の気持ちでいっぱいです。みんなと一緒にナミビアに行けてよかった、ありがとう！大好き。

初めて見る景色の中で

教育学科2年　ＹＹ

今回のスタディツアーでは出発前に自分自身で想像していた以上に多くの事を感じ学ぶ機会になりました。

このスタディツアーで最も感動したのは星空です。私が夜中に見た星空は迫ってくるように感じるくらい強く光っている星が空一面に広がっていて、人生で見た星空の中で一番美しかったです。違法なライトを出しているホテルの光一つで目で見ることのできる星が減るという説明を受けた時初めてライトポリューションの影響力を実感しました。帰国したとき 10 日ぶりに東京の夜景を見てきれいだと思いまいましたが、その時に、東京で生活しているとビルや街頭、広告の明かりに慣れてしまい星を見ることが出来ないから夜景をきれいだと感じてしまうのかもしれないと気づきました。これはナミビアで美しい星空を見る事が出来たからこそ考えが変わったのだと思います。

NaDEET で生活した 3 日間流さないトイレやバケツシャワーを利用したり、太陽光を利用してソーラークッキングを行ったりなど自分たちの生活に実際に持続可能性を考えたエコを取り込み、体験し、測定することで今まで自分たちが必要以上の水やエネルギーを使用していたことを学びました。また、東京でのエネルギーや水の総量やその現状について知っている人の数の少なさを想像し日本の未来に物凄く焦りを感じ怖くなりました。

また、スタディツアー中毎日１日の終わりにするラップアップは私にとって物凄く大切な時間となりました。1 日で得る情報量が多いため、どうしても自分の頭の中だけだと忘れてしまう事もあるため整理をする貴重な時間でもあったし、一緒に参加した方々がその日どんな事を感じたかを知ることが出来て、又、それぞれ個性あふれる表現方法でシェアをしてみんなの考えを知り学びを深める有意義な時間を持つことができました。NaDEET で持続可能な社会を目指すための実践的な生活をし、多くを学びましたがそれを東京に帰っても行う事はとても難しい事だと思います。だから、東京での生活が環境や動物に影響している事など ESD についてたくさん学ぶことの出来た私達は自分自身が東京に帰っても今回学んで感じた事を忘れないことと多くの人に共有することが一番大切だと感じこれからの私達の行動にかかっていると思いました。そして、私はスタディツアーに参加しなければ見る事の出来なかった美しい景色と思い出を一生忘れません。

憧れから学んだこと

教育学科2年　ＡＹ

ずっと憧れていたスタディツアーとアフリカ大陸。どちらも夢が叶うのだと知った瞬間の高揚感は今でも鮮明に覚えています。いい意味で実感が全く湧かず気づけば出発日だった気がします。滞在中に出会った全ての事柄は私を奮い立たせ感動させ考えさせてくれる特別なものでした。特に 10 日間の旅の中で特に印象に残ったことは 3 点あります。

まず、「人の温かさ」

ナミビアでお世話になった方々は、住む地域も育った文化もすべて違う私たちを歓迎してくれ本当に嬉しかったです。拙い英語を話す私の言葉に耳を傾け色んなことを教えてくれたナミビアの方々には人の温かさを感じることができました。東京でなんとなく過ごしているだけでは、感じることのできない他者を思いやり支え合う大切さを体験することができました。また、スタディツアーに参加するまで出会うことのなかったメンバーも本当に心の広い方ばかりでした。このツアーが始まるまで学年も学科も違い知らない者同士だったはずなのに、様々なことを 10 日間で共有し合ううちに絆が生まれました。異国の地で共に向き合ったからこそ築くことのできた絆に私は感謝の気持ちでいっぱいです。

つぎに、「素直になることの大切さ」

10 日間の写真を見返すとどれも無邪気で無垢な姿の私たちがいました。あんなに笑顔にな

れたのはいつぶりだろう、何も考えずに砂に飛び込んだのはいつぶりだろうと思いました。五感をフルに活用し感じるまま見たまま思ったままに行動・発言できたあの日々は、肩の荷がストンと降りて素直な自分でいれた気がします。大学生になり社会にこれから飛び立つ身の私たちにとって日々の生活は慣れないながらに大人の真似っ子をして失敗して学んでの繰り返しです。大人になるということは、私たちの中から無邪気や無垢な心や表情がなくなっていくというこかとなのかもしれないなと今振り返ると思います。いい意味で後先考えずガムシャラになることで今まで見落としていたことがたくさん見えてきました。目に見えるものばかりに捉われず、隠れている大切なことに気付ける人になっていきたいです。

最後に「母なる大地」

母なる〇〇という言葉は本や演劇でよく耳にしますが、今まで地球の偉大さを肌で感じながら生活することがなかったため、いまいち意味が分かりませんでした。しかし、ナミビアを訪れて初めてこの言葉の意味が分かった気がします。今にも落ちてきそうなくらいに大きな星たち。生命の音がしない砂漠。一本の木から繋がる命の連鎖。どこまでも繋がる道。「母なる大地に生かされているんだ」当たり前のことですが、この言葉意外に見当たる言葉がありませんでした。美しく強く脆い地球に私たちは生かされており、人間は、地球にとって一部であり中心ではないことを強く実感しました。今までは、自分たちの生活が豊かになることばかりを考えた生活を送っていましたが、これからは母なる大地のことを考えた生活を心がけていこうと思いました。

この 10 日間で出会えた学びの数々は私の価値観を大きく覆しました。これらを一つも忘れることなく、これからの大学生活で生かしていきたいです。このスタディツアーに関わってくださった全ての方々に本当に感謝しています。ありがとうございました。

地球を共有する一員として

国際交流学科2年　ＫＩ

ナミビアという国を聞いて、何を思い浮かべるだろうか。多くの人はナミブ砂漠や野生動物を思うだけであろう。もしくは貧しい国を想像するかもしれない。私はこのスタディツアーに参加するまで、日本よりも社会的技術的、政治的に発展していないこの国に教えてもらうことがあるのだろうかと疑っていた。

しかし、このスタディツアーを通して私は自分の生き方を考えさせられた。中でもNaDEET の学びは自分に大きな影響を与えると同時に、NaDEET での生活は人生で一番電力を使わなかった日々であると言える。水に関して言えば、私達がトイレで流す 3 回の水の量で一日を過ごしていたのだ。このことだけを聞けば、どんなに貧しい生活をしていたんだろうかと思う人がいるかもしれない。しかし、NaDEET での生活は想像以上に、環境的にも精神的にも充実していた。朝になれば、赤すぎて焦げてしまいそうな朝日が見え、耳をすませば騒音一つ聞こえず、風の音しか聞こえない。夜になり空を見れば今にも落ちてきそうな星が沢山見える。その地で地球について、日本での生活について考えた。私達人間は、常に快適さや楽さを求め、日々様々なものを開発し、消費している。常に人間が中心に考えられていて、快適さの裏に隠された地球への代償を見て見ぬ振りをしていることに気づく。

ナミビアのサファリでは、人間が中心の世界ではなく動物が中心にいた。確かに私達の与えられた環境において、何も考えずに生活をすることは快適であり楽である。差しっぱなしのコンセント、蛇口からポタポタと垂れる水、電気を見ても今までの私はなにも思わなかった。しかし、差しっぱなしのコンセントを抜くだけで、蛇口をしっかりと締めるだけで、電気を LED に変えるだけで、多くの資源の節約になることを身をもって学んだ。多くの人はこの少しの行動がどれだけ重要なことを知らない。今までの生活にほんの少しの行動を心がけるだけで、地球に優しい生活が送れるのに。

日本から 1 万 4000 キロという異郷の地で、地球を共有する生き物の一員として人間中心の世界や、自分の生活の快適さばかりを考えてはいけないと強く思った。また、常に世界は沢山の問題を抱えているが、その問題が深刻であっても、複雑であっても、常に解決方法は至ってシンプルであると知った。様々な障害や妨害が私達の世界には沢山あり、そのため本当に大切なものや事を忘れてしまっているのではないかと思う。生き物が存在しない砂漠に登って、その地にポツンといる自分を見つめながら、人間の小ささを感じる。このスタディツアーで感じた事、考えた事、学んだ事を忘れないために、このことを学んだ 1 人の地球人として、これからの私の行動が試されているのではないかと思う。

美しい地球を守ろう

教育学科2年　ＭＨ

私はナミビアに生まれて初めて行きました。出発する前、ナミビアと聞いてイメージしたことは、「貧困」と「何もない土地」ということでした。サバンナと聞けば、何もないサラサラとした土があるだけで、緑はないのではないかと思っていた。しかし、何もないと思っていたナミビアでの体験は私にとって一生の思い出となり、忘れられないものとなりました。

まず、NaDEET での生活は私にはとても新鮮で刺激的でした。デジタルデトックスをし、普段経験することができない「不便さ」を味わいました。この「不便さ」は決して不快なものではなく、自然と適応することができました。必要最低限の水、食糧、エネルギーでこんなに快適な暮らしができるのかと驚きました。でも、それは乾燥しているナミビアの気候ならではの特徴によってできることだとも考えました。日本は、温帯で、とても湿気が多いた め、乾燥しなければならないので、日本では経験できないことがあると感じました。特にバケツシャワーでは日々の生活でいかにお湯を使い過ぎているかを感じました。私はいつも当たり前にお湯をバスタブに溜めて使っていました。にも関わらず、NaDEET ではバケツ一杯で全身を洗えることを体験し、日々無駄遣いをしていることがわかりました。また、不便な生活を共に過ごすことで」、施設にいる方達とも絆を深められたと感じました。

さらに、NaDEET の経験は SDGs の矛盾にも気づくきっかけとなりました。都市化を目指して働きかけている一方で、自然を保護していこうという目標があります。都市化を進めると、電気を使うことが増え、星がきれいに見えにくくなってしまいます。どちらもこれからの未来に必要なことではありますが、人々の安全と、自然保護は時に反比例してしまうことに気づきました。どちらかがよくなると一方が欠けてしまいます。動物も人間も地球も良くなる方法を探していかなければならないと思いました。

砂漠 No.45 では、地球の偉大さを知りました。地球がこんなにも偉大であることを感じて、涙を流したことは忘れません。こんなにも美しい地球を私たちの私利私欲のために汚しているのかと思うと、世界規模で地球温暖化に取り組んでいかなければならないことを強く感じました。ビクトリアさんから私たちの力は小さくても意味のない行動にはならないと教えていただきました。ナミビアから帰ってきてから、私はペットボトルを買うのを控えて、マイボトルを持つように心がけるようになりました。小さなことですが、世界規模でマイボトルを持つ人々が増えれば、ペットボトルの需要も減り、プラスチックの使用量を大きく減らすことができると思います。

つながり

教育学科2年　ＲＯ

ナミビアで生活した約 10 日間での 1 番の学びは、はるか遠くに住む人や動物、虫、また太陽、月、宇宙までもがすべて自分の生活と関係していることを身をもって実感したことです。また、自然の偉大さに改めて気づかされました。このスタディツアーが、私にとって価値ある経験になったことは間違いないです。

ナミビアでの体験の中で特に NaDEET での生活は印象的で、シャワーはバケツ一杯しか浴びられない、洗面台には蛇口がなく水を汲んできてためて使う、トイレは野外で夜は暗く、懐中電灯なしではいけない、ガスは通っていなくてご飯は太陽光の熱で作る、と一見不便な生活でしたが、慣れてくると意外とストレスなく生活できました。NaDEET での暮らしのように少ないエネルギーでも生活できるのに、普段の私たちの生活では当たり前のようにたくさんの地球の資源を消費しながら生活していることに罪悪感を感じました。NaDDET は星空が本当に綺麗で天の川や流れ星も見ることができました。砂漠に寝っ転がってみると空が半円を描いていて、「地球って本当に球体なんだ」と感動したりもしました。日本では家の中に虫が現れると邪魔だから潰しちゃえと思ってしまうけど、砂漠という大自然の中にいると虫も不思議と愛おしい存在でした。動物も本当に身近な存在でオリックスやスプリングボックスが普通に歩いているし、道路をダチョウが横断したり、野生のシマウマがいたりアフリカらしい体験もできました。観光で行ったサファリで見た、キリン一頭とその周りをいっぱいの鹿たちが跳んだり、歩いたり、闘ったりしていて、さらにその奥には山が見えて夕日が沈んでいっている壮大な風景は、今でも目に焼き付いています。その風景はすごく綺麗で、ナミビアの夕日は力強くて感動しました。その反面、サファリでは気候変動の影響で、乾燥が続き食料がなく動物が減少しているという現状があります。気候変動の原因の多くは私たち先進国の影響であるのに、こんなに遠くに住む動物が深刻な状況に置かれていることにショックを受けました。

日本に帰ってきてからも、ナミビアでの生活を思い出すことがあります。例えば、シャワーを気持ちよく浴びているときに、あの時はバケツ一杯の水でシャワーをしたのにどうしてこんなに水を使っているのだと思い、洗面器を使って節水してみたり、星がナミビアのようにきれいに見えないことにがっかりしたりします。夜景はライトポリューションなのかなと考えたりもします。ナミビアに行く前とは、ものの見方や感じ方が少し変わっていてナミビアに行けたことに感謝しています。ナミビアで学んだことを忘れずに、人への思いやりだけでなく、自然や生物などすべてのものを尊重し、思いやる気持ちをもって生活していきます。

Living Together

教育学科3年　ＨＡ

初めての足を踏み入れたアフリカ大陸にあるナミビア共和国は、「生きている」ということを本当の意味で実感させられた場所のように思う。

今回のスタディツアーの中でも最も「生」を感じたのがサファリ・ゲームでの体験である。先の見えないほどの雄大な自然、そしてそこにいる背筋がピンと姿勢のいい凛としたキリンの姿、ズシン、、、ズシン、、、という足音を出しながら歩む貫禄のあるゾウの姿は、日本に帰国した今も忘れられない。日本でも数回は目にしたことがある動物であるのに、初めて、「キリンやゾウは生きているのだ」ということを実感した。また、野生動物を見るために足を運び、車中から覗く自身の姿がとても異質に、滑稽に、感じてしまった。遥か昔を連想するような、映画のような、そのような土地に近代的な様相で存在していることがとてもおかしくて仕方がなかった。サファリ・ゲームの土地や堂々たる野生動物の姿、そして確かに動物が存在していたことがわかる骨などを認識し、そこにある「生と死」から何かを感じ取ったことは間違いなく、「生きる」ということが当たり前であった自分と一瞬一瞬を生と死の狭間で生きている動物たちとのギャップを否が応でも実感させられた。

また、動物や自然に対しての「生きている」だけでなく、星も「生きている」ということを感じさせられた。NaDEET での生活は太陽の力を利用するものが多く、太陽の存在なくしては生活できない。そのため、太陽が生きているからこそ自分の生活が成り立っているということを再認識することができた。そして、夜の NaDEET は、東京のような街灯などの人工的な灯りはなく、月を始めとする多くの星が唯一の明かりであった。雲が深い日は目の前がわからないほどの暗闇に包まれ、今までに経験したことのない暗闇はとても恐ろしいものに感じられ、何気なく存在していると思っていた月や星も生きているということを知ることができた。

物質的に裕福な日本では気づくことができない、別の視点から「生きる」ということを実感し学ぶことで、生命は支えられ支え合っている存在、相互作用や循環をして同じ地球上でみんなが生活しているということ、また、宇宙からの恩恵を受けて生活を育んでいるということを理解することができた。自分本位、人間本位の生活ではなく他を思いやる気持ちをわすれずに、日々を過ごせるように心がけたい。

共に生きる

教育学科3年　ＫＮ

今回のスタディツアーは、大自然なナミビア共和国で、普段考えることが出来ないこと
と向き合うことが出来た１０日間でした。今まで生きた中で、自然の力にこんなにも感銘を受けることは、ありませんでした。地球というものは人間のものだけではなく、動植物すべての生き物のものだと改めて実感することが出来ました。その自然は、現在破壊されつつあるということを NaDEET の生活または、サファリで出会った動物を見て気づかされました。この広大な大地と比べると、人間というものは、とても小さな生き物ですが、自然を破壊する能力を持っている危険な生き物だと身を持って実感しました。

NaDEET での生活は、決して快適で便利な生活ではありませんでした。しかし、この施設では、太陽光で料理や電気を使うなど自然のエネルギーを有効活用し、最低限の生活をすることで、地球と共に生きている感覚になりました。その一方で、普段自分たちがどれだけのエネルギーを使っているのか身を持って体験しました。この生活を日本に帰っても、ずっと出来るかというと必ずしも出来るとは言えません。どこまでこの生活を実現し、どこから妥協するかをとても考えていた時、Viktoria さんが「君たちは、ハチドリだ」とおっしゃってくれました。１人が変わっても、何も変わることはないと思っていた私にとって、とても印象的でした。NaDEET での生活をすべて取り入れなくても、自分の出来ることから行い、少しでも地球は自分のものだけではないと意識することが重要だと分かりました。

また、私は、このスタディツアーで最も楽しみにしていたのはサファリでした。しかし、実際に野生動物を見ると、想像していたのとは違い、やせ細った動物が多く、道端には、骨があり、ショックでした。弱肉強食の世界なので仕方ないことかもしれませんが、それだけが原因ではありません。地球温暖化により、干ばつが進み動物たちは食料に困っています。私たち人間が原因で、地球に生息している動植物をも傷つけ、もちろんいずれは、私たち人間にも影響してきます。サファリを通して、人間が今まで何も考えず、環境に悪いことをやりたい放題やってきた罪は、重いなと実感しました。

さらに、自然以外にも、人とも向き合うことが出来ました。毎晩 1 時間程度のラップアップは、私にとって、とても新鮮なものでした。普段友達と、環境問題などの深い話をしたことがなく、話をしてみると、みな考えることは、異なり、自分では考えない視点から、物事を考えているので、とても面白く、勉強になりました。また移動時間や夕日、夜空など一人の時間を設けて下さったので、自分と向き合うことも出来ました。

今回、このスタディツアーを計画して下さった永田先生、より深い学びを提供して下さった水島先生、木戸先生、そして 12 人のメンバーには、心より感謝しております。この貴重な

経験を無駄にせず、日々精進していきます。

Learning Cycle through the Nature

国際交流学科4年　ＲＩ

今まででいちばん学びの濃かった 10 日間だった。自然と向き合い、人と向き合い、自分自身と真正面から向き合った。普段は先生や講師の方から学ぶことがほとんどだが、今回のスタディツアーでは、先生はもちろん、自然そのものと、一緒に学んだ他の学生から学んだことがほんとうに多く、その学びが、これまでにないほど深かった。というのも、このスタディツアーで私がいちばん綺麗だと感動したのは、もちろん壮大な自然もそうだが、みんなの「心」だったからだ。純粋で、無垢で、美しい心を持ったみんなの言葉ひとつひとつが自分に刺さり、それについて深く考えさせられた。そのため、自然を通して感じたみんなの学びをシェアするラップアップの時間が、私にとっていちばん幸せで、学びの濃い空間だったと思う。

スタディツアーでは「考えずに、感じよう」と試みたものの、なぜか終始ずっと深く思考を巡らせていた。そのくらい環境の差が激しかったのだと帰国してから気づいたが、壮大な自然を前に、様々な疑問が頭に浮かんできて、好奇心からその答えをずっと追い続けていた。例えば、「砂漠は何故美しいのか」と先生が問いかけたとき、そもそも砂漠は何故「美しい」と認識されていて、私はそれを（少ししか）感じ取れなかったのだろう。また、デッドフレイを見学して、「私たちは死んだらこの世から『存在しなくなる』のに、ここの木々たちは何故死後 1,000 年にもわたってこんなにも凛々しくここに『存在』しているのだろう、といった疑問である。日本とは 180 度異なる自然の中で、日本では感じ取ることができないものを感じ、触れ、五感をフルに使って堪能した。「自然に生かされていること」にまた深く思考を巡らせ、それをすぐにシェアしたりアウトプットできる仲間や先生方がいらしたこと、その環境がとてもありがたかった。私がこのスタディツアーで印象に強く残り、帰国後も答えを探しているのは、「妥協点」である。私たちは NaDEET でたくさんのことを学んだ。環境について、生物多様性について、相互に影響し合っている生態系について、先進国と言われている私たちが罪悪感を感じずに何気なくしていることについて。「なんで環境教育を、ほとんどエミッションを出していない途上国で学ぶんだろう」と鋭く指摘する学生もいた。よく言われていることだが、「人間、生活水準を下げることは難しい」。NaDEET の Viktoria さんも言

うように、Free Time（私たちの生活習慣）が環境にいちばんインパクトを与えている。「習慣」というのは、それほど厄介で恐ろしいことなのだと学んだ。また、ソーラークッキングやファイアーボール、バケツシャワーなど、NaDEET で学んだことを、そのまま私たちの生活にコピーするのは無理があり、現実的ではない。しかし NaDEET の生活を知ってしまった以上は、日本での生活に戻ると罪悪感を感じてしまう。

つまり私たちの本当の学びはこれからである。私たちはこれから罪悪感と戦い、葛藤しながらも「自分が納得できる妥協点」を模索しなければならない。NaDEET をイメージしながら首都圏で生活するのは苦しくなりそうだが、Viktoria さんが教えてくれたように、「はちどりのしずく」となって小さなことから続けていこうと思う。

ESD の実践と学び

教育学科4年　ＮＴ

大学において２度目のスタディツアーとなる今回の訪問は、確実に日本では経験できない空間での学びがあったことを断言する。初めてのアフリカ大陸への上陸ということで、楽しみな気持ちと日本のメディアや保険会社の方の慎重な説明から煽られる不安を胸に出発した。２度の乗り換えを経て約１日を要して到着したナミビアという国は、過去最高に湿度が高く息苦しいほどの湿度をまとった日本とは正反対の、カラっと澄んだ空気が広がっていた。

今回のスタディツアーで最も印象的だったのは、メインディッシュともいえる NaDEET での３泊４日の ESD 実践プログラムだ。あまりにもシンプルで濃厚な日々は、私を変容させるには十分であった。

初日に泊まったホテルを朝早く出発し、約７時間、「ナチュラル・マッサージ」という名のでこぼこ道の洗礼を受け到着した場所は一見何もない砂漠であった。私たちが宿泊する場所まで砂丘を２つほど越えなければならず、初めて歩く砂の地は想像以上に体力を奪い、これからの４日間に少し絶望した記憶がある。ついた場所には、窓のない家、電線がなくすべての電力を太陽光で賄い、水を流さないトイレ、バケツで浴びるシャワーなど今まで全く経験したことのない生活が待っていた。

水の量を気にしてお風呂やトイレを使ったこともなければ、使用量を見たこともなく、島

国で雨の多い日本という国に甘えていたことを知った。１日目、どれだけ水を使ったかの計量の際、４チーム中最も少なかった。なぜか凄く嬉しかったし、次の日はもっと減らせるように頑張った。暖かいお湯に包まれることのできるお風呂が大好きな自分とは思えない感情で驚いた。同時に自分たちは日本で言うトイレを３回流すのに使う水で、洗いものや飲料水などもすべて賄うことができたことを知り、どれだけ自分が地球に傲慢に接してきたかと、深く衝撃を受けた。

NaDEET へ行くまで、国内で様々な環境問題について考えている人の話を聞き、納得し自分も変わらねばといつも思ったが、自分ひとりの行動で世界が変わるのか疑問が拭えず、なかなか実行に移せなかった。しかし今回初めて地球に優しくする意味を実感し、NaDEET 代表のヴィクトリアさんのお話から、自分はハミングバードになれると背中を押していただけたことで、小さなことでも行動し続けようと、やっと決断することができた。

これからの生活は資源と情報に溢れかえり、何が必要で何が必要ではないかが判断しづらい環境に戻るが、NaDEET で感じたことと５つの約束をしたハンドプリントを胸に、流されず自分の道を進んでいきたい。

最後になるが、今回のスタディツアーを企画運営してくださった先生方と、サポートしてくれた両親をはじめとする全ての方々に感謝申し上げる。

ナミビアスタディツアーを終えて

教育学科4年　ＨＭ

今回のナミビアでのスタディツアーでは、今までに感じたことのないような感情がいくつも湧き、自分の人生を見つめなおすことができた１週間でした。就職活動が終わり、学生生活も残りわずかとなってきた中で、このスタディツアーに素晴らしいメンバーと参加できたことを心底幸せに感じています。

私がこのスタディツアーに参加したきっかけは、大学４年間で環境問題を勉強し、地球が100年持たないという事実を知った上で、実際に自分の目で現状を確かめたいと思ったからです。また、世界で起こる課題や問題を自ら確かめ、今の自分に何ができるか考えたいと思っていました。

実際にナミビアに自分の足で訪れ、NaDEETで生活したことで、いかに毎日自分が無駄なエネルギーを消費していたか知る事ができました。無意識のうちに、シャワーを出したままにしていたり、電気をつけたままにしていたり、コンセントを刺したままにしていたりと、数えきれないほど地球に負荷を与えていました。さらに毎日受けたビクトリアさんのお話は全て説得力があり、とても心に残っています。日本に帰ってきてから、プラスチックに溢れているスーパーマーケットやコンビニ、水が当たり前のように流れ出ているバイト先にショックを受けました。そんな中でも、自分に何ができるだろうと考え、少しでも地球のことを考えて生活しようと思いました。水筒を持ってペットボトルの消費を控えたり、ビニール袋をもらわなかったり、小さなことから始めることが大切だと学びました。

もし自分一人でナミビアに行ったとしたら、きっとこの感想を書くことはなかったと思います。先生方を含めた15人で行ったからこそ、自分の中での価値観が180度変わり、たくさんの感情が芽生えたのだと思います。ナミビアで過ごした10日間は、私の中で一生忘れることのない思い出となりました。この場をお借りして、お礼を言わせてください。素晴らしい経験をさせてくださった永田先生、ナミビアに送り出してくれた両親、10日間素敵な思い出を作ってくれた12人の仲間、ナミビアで出会った方々、本当にありがとうございました。これからもナミビアで学んだことを心に留め、生まれ育った地球を守っていきたいと思います。

自然の力と美しさ

木戸啓絵

ナミビアでの日々は、とても刺激的で新鮮なことばかりだった。灼熱の砂漠の中を長時間移動してたどり着いたNaDEET センターでは、心身ともに慣れるまで少し時間がかかったが、日を追うごとに砂漠での環境に適応し、自分の生命力が生き生きとみなぎってくるのを感じた。これを書いている今でも、ソーラークッカーで作ったごはん、蛇口ではなくタンクで汲む水、バケツシャワー、エコトイレ、ごみの管理、真っ暗な夜空に光る満点の星、風に巻き上げられ部屋に吹き込む砂の音とその感触などを、とても懐かしく思い出す。ナミビアでのシンプルで充実した生活を通して、「便利さと心地よさ」について、あらためて考えさせられた。生物多様性、エネルギー、ごみ、光害などをテーマとしたNaDEETセンターでの様々な活動を通して、自然の美しさをあらためて感じ、母なる地球への感謝の気持ちが自然と心に広がった。このツアーを通じて、持続可能性とは「ピュアなそのものらしさ、その人らしさを生かすこと」ではないかと思うようになった。今回のツアーに参加するにあたり、自分の研究テーマでもある「持続可能な社会の構築と幼児教育の関係性」について、なにかヒントになるものはないかと探していた。NaDEET 代表のヴィクトリアさんは、「幼児期に持続可能な環境で生活することを通して、子どもにとって地球にやさしいライフスタイルが当たり前のものとなり、それを繰り返していくことで習慣化する。だから、幼い頃から持続可能な社会のなかで生きていく経験が必要なのだ。」とお話されていた。また、ヴィクトリアさんの娘さんたちが、天真爛漫に自然の中で伸び伸びと過ごす姿に触れ、頭で理論的に物事を理解するだけではなく、心や体で思いっきり自然を味わう生活を送ることは、子どもたちの教育にとって欠かすことはできないものだとあらためて実感した。

このスタディツアーでは、環境教育施設の訪問以外にも、ソススフレイにあるデッドフレイ（死の谷）のデッドツリーに、とても感銘を受けた。白い砂と赤い砂丘と木々の織り成す景色はすばらしいものだったが、デッドツリーがなぜ世界中の多くの人々の心を虜にしているのか、はじめはわからなかった。しかし、ガイドの方からこの場所の説明を聞くと、目の前に広がる光景は私にとってまた別の意味を持つようになった。デッドツリーと呼ばれる木々は、1000 年前に水がなくなり、木自体は枯れているにもかかわらず、今もなお朽ち果てることなく立ち続けている。一般的には、人は死んだら土に還る。しかし、デッドツリーの木々は、死してなお、1000 年以上もその存在を私たちに見せてくれている。デッドフレイ（死の谷）で見たデッドツリーが、亡くなった方々と重なって見えるような気がして胸が詰まった。きっと、目に見えない形で死者もまた存在し続けているのかもしれない。

このスタディツアーを終えて、持続可能な社会にとって、また自分にとって、何が必要で、何が必ずしも必要ではないかが、今までよりはっきりしたように思う。最後に、このツアー

を企画してくださった永田先生をはじめ、お世話になったすべての方々に感謝したい。

このAI時代に「始原」に接することの意味合い
－ ナミビアスタディツアーにアテンドして －

水島尚喜

活力の無くなった近代芸術に、再びアート本来の生命力を宿らせようとして、ピカソは、「アフリカ美術」に回帰しようとしました。また、同時代にクレーは「子どもの美術」にヒントを得ようとしました。二人が交わることはありませんでしたが、両者ともに成熟し切った文明の行く末に見切りをつけ、芸術の再生に「始原のアート」を抜擢したのでした。

我々の日常生活の中では、物事の始原の姿に触れる機会はあまりないと言って良いでしょう。ここでいう始原とは、辞書通りの「物事の始め」というよりも、型が生まれ出るその瞬間の時空をイメージしています。私たちの日常では多くの物事が経時変化した状態で存在し、言語的、制度的な衣を纏って、見聞きされています。現在眼に入る全ての形象には、そのオリジナルな形があったのにも関わらず。自然の万象や生命の形においても、この宇宙が生まれて以来、必然的な成り行きによって定位されてきたものと言えるでしょう。

思い出してみましょう。我々が刮目したあの世界最古のナミブ砂漠の砂丘に出現する鋭角のエッジ、そしてその稜線から発せられた微細な砂の粒子、それらによって演出される金色の砂煙、その砂煙は、刻一刻と形を変えながら存在する砂丘と裏腹でした。全てが連鎖し、全てが美しいまでに必然の姿形でした。

一方、皆さんは、人間の生きるに当たっての必要最小限の状態について自覚的な生活をNadeet で送りました。人が必要な水やエネルギーについて体験的に学んだ内容は、単なる知識ではなく、生きた叡智となって血肉化されたのではないでしょうか。以上の体験は人間の太古の始原的姿ともオーバーラップします。そして、始原の状態を知っていることは、強さにもなります。迷うことなく立ち返るべき場所を皆さんは知っているからです。

ツアーに参加した我々は、ナミブ砂漠のあの美しさを知っています。地球という惑星に存在していることの必然的な意味も直感しました。皆さんと貴重な人生の時間帯を共有できたことは私自身の宝物でもあります。同僚の永田先生はもちろんのこと、そして、NaDEET のスタッフの方々には、結晶体のような意志とその行動力に最大限のレスペクトを持ちました。関係者全ての方に、感謝致します。ありがとうございました。

（今回のツアーで、一つだけ後悔していること。：砂漠の中で、一曲を所望された際、ZABADAK「遠い音楽」を歌うべきでした！曲をご存知ない方は、ユーチューブでぜひチェックされますことを。。。）

10. フォトギャラリー

ウイントフック・ホセア・クタコ
国際空港到着

Joe's Beerhouse で夕食

移動中・・・

St. Joseph's Primary School 訪問

St. Joseph's Primary School で「世界に一つだけの花」の歌とダンスの披露

St. Joseph's Primary School の子どもたちとお別れ

NaDEET 到着

ソーラークッキング

砂丘での生き物観察へ

生物多様性に関するレクチャーの様子

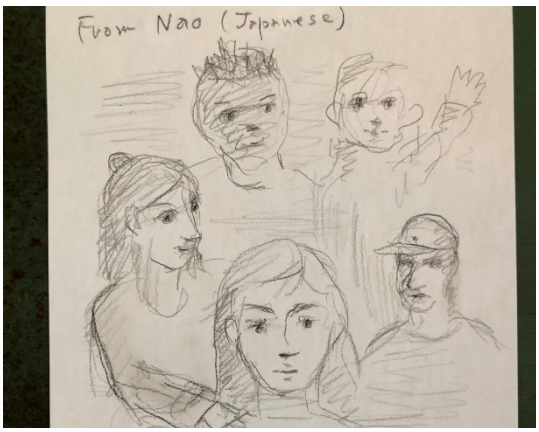
砂丘でゴロゴロ

ゴミの計量

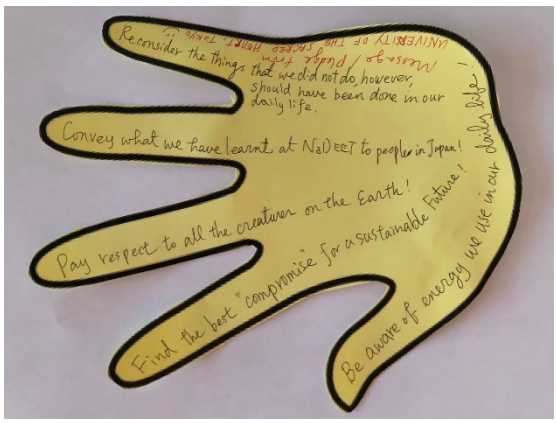
ファイヤーボール作り

砂丘での１人の時間

ラップアップ



ラップアップの内容



ハンドプリント

Viktoria 代表の娘さんから
絵のプレゼント

NaDEETとお別れ

セスリムの渓谷訪問

セスリムの砂丘（No.45）を登山開始

セスリムの砂丘（No.45）を登山中

デッド・フレイに向かう前朝日を浴びる

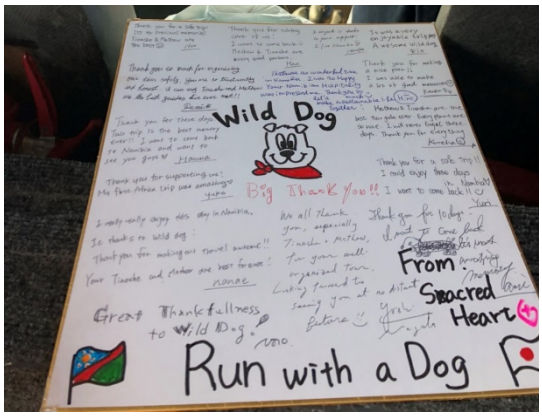
デッド・フレイ訪問

Tropic of Capricorn(南回帰線）
に立ち寄る

スワコプムンドの NaDEET　Urban
Sustainability Center　訪問

サファリ体験

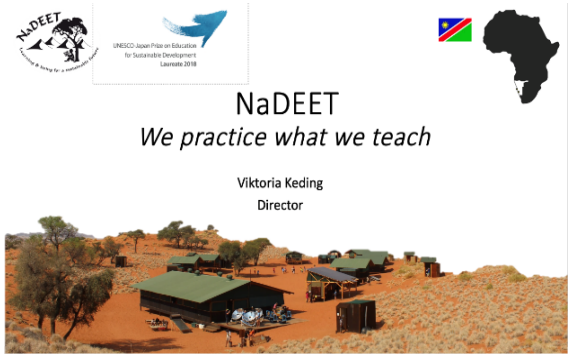
最後の夕食

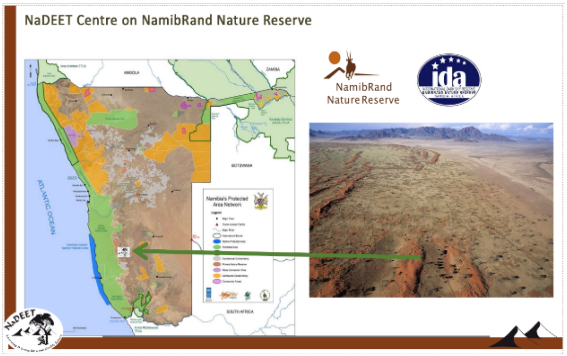


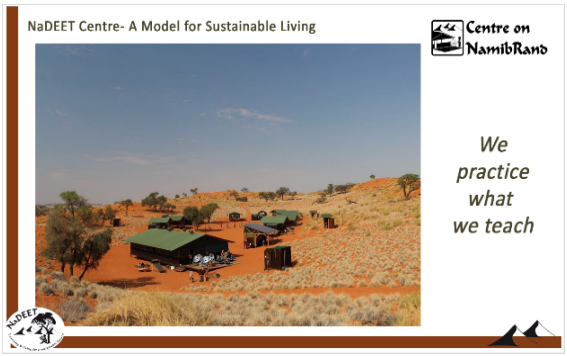
ガイドさんへの寄せ書きのプレゼント

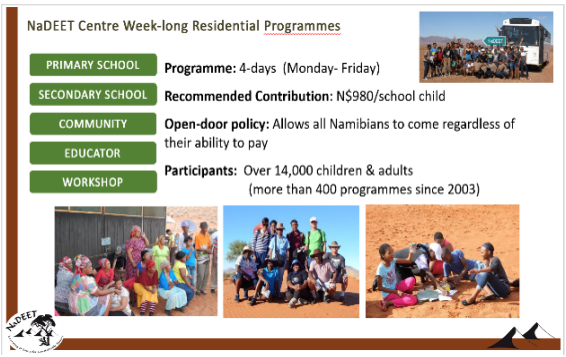
ガイドさんともお別れ・・・

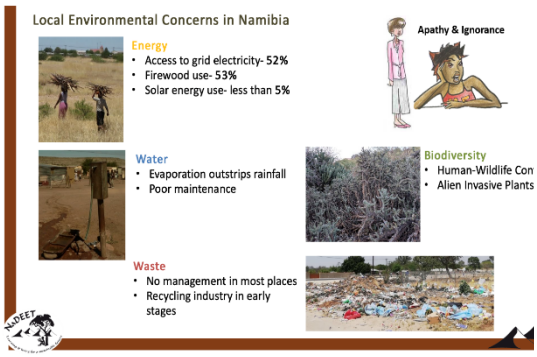
11. NaDEET 代表 Viktoria さんのプレゼンテーション資料



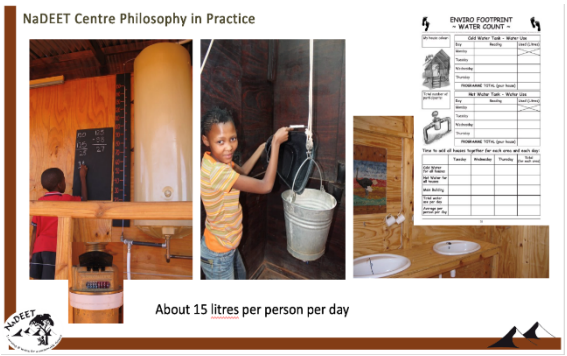


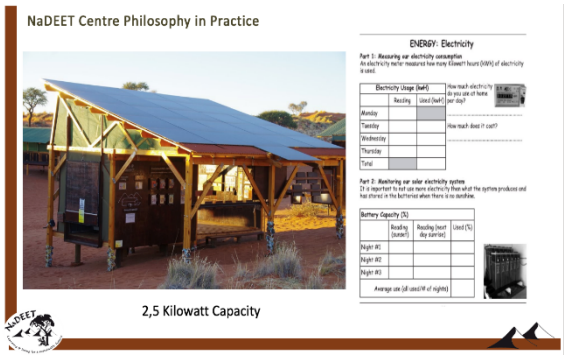






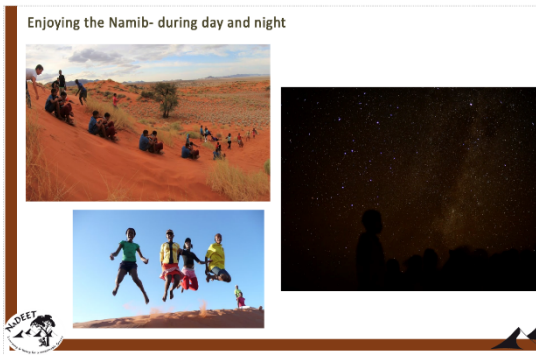
NaDEET Centre Philosophy in Practice
6- 8 schoolchildren per sustainable living team


NaDEET Centre Philosophy in Practice
ENVIRO FOOTPRINT
- WATER COUNT -
About 15 litres per person per day


NaDEET Centre Philosophy in Practice
ENERGY: Electricity
2,5 Kilowatt Capacity

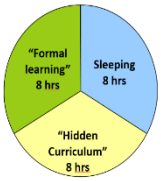
NaDEET Centre Philosophy in Practice
RECYCLED FIREBRICK DRYING RACK
Reduce, Reuse & Recycle

The World's Oldest Desert- Our learning environment


Enjoying the Namib- during day and night

NaDEET Centre's - "We practice what we teach" philosophy
a *Whole Institutional Approach*

Formal learning:
Integrating hands-on activities & curriculum concepts



Sleeping:
resting under the dark skies in nature

Hidden Curriculum:
learning from everyday activities:
cooking, cleaning, bathing, throwing away rubbish, socializing

NaDEET participants are our ambassadors

What is the result:

"The NaDEET programme made me realise what is going on out in the world and in Namibia. Just how much pollution and damage is being done to our environment is horrible, and NaDEET has made me feel I need to help and take action into changing this."
- learner from Windhoek

What is the result:

Teachers say:

- "I use much less water than from my first visit. It has become a habit!"
- "It was exciting. I was exposed to a whole new world where every little thing means a lot."
- I wanted to come to NaDEET to sharpen my skills in environmental education and sustainable development.

Johannes Shalonda

He reports:
He used all of the NaDEET magazines as reference material for science class since grade 9!
Now a teacher, he has gotten 6 other colleagues to sign up.

Schools and their communities taking action

Priority action area 5: Accelerating sustainable solutions at local levels

At community level, scale up ESD programmes and multi-stakeholder ESD networks

UNESCO-Japan Prize on ESD **Winners 2018**

In honour of outstanding projects in the field of ESD

UNESCO-Japan Prize on Education for Sustainable Development
Laureate 2018

Where do we go from here?

Upscale our work- Reach more Namibians

Teacher workshops

Translation of educational materials in Namibian languages

Urban Sustainability Centre

Additional centres in new locations

It's Time to Grow

Translation into:

Oshindonga

Otjiherero

Khoekhoegowab

Rukwangali

&

Silozi

translated, to be distributed in 2019 !

Urban Sustainability Centre

- Intended visitors: The general public, schoolchildren and tourists.
- Potential reach: 8,000 schoolchildren; 5,000 tourist and adult visitors per year.

Based on the widely popular **NaDEET Centre approach** to environmental education,
NaDEET's newest project in Swakopmund is a day visitors centre.

Urban Sustainability Centre

Education for Urban Sustainability

United Nations' Sustainable Development Goal #11:

The future we want includes cities of opportunities for all, with access to basic services, energy, housing, transportation and more.

Some Key Topics to Address within SDG 11:

1. Housing
2. Transport
3. Energy & Water
4. Population
5. Cultural Heritage
6. Waste & Pollution
7. Open Spaces

Urban Sustainability Centre

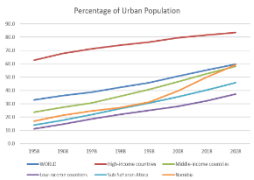
Urban Stats- Global and Namibia

By 2030 about 60% of the world's population will live in urban areas.

According to **2011 Namibia Population and Housing census** the % of Namibians living in urban areas increased from:

- 27% in 1991
- 33% in 2001
- 43% in 2011

Namibia will transit from being a mostly rural society to an urban society.



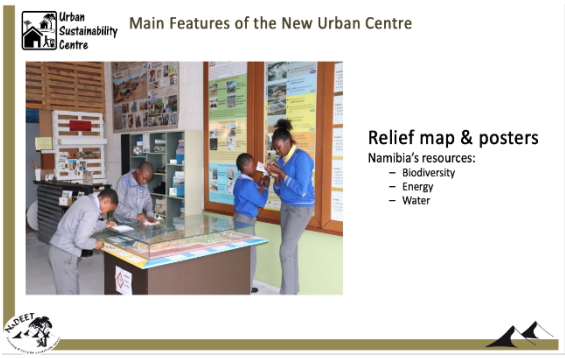
Urban Sustainability Centre

Main Features of the New Urban Centre

Environmental Discovery Area

Introduces visitor to Namibia's environment & environmental threats

Urban Sustainability Centre
Main Features of the New Urban Centre
The Eco House
Sustainability Lives Here
Exploring sustainable solutions to how we live.


Urban Sustainability Centre
Main Features of the New Urban Centre
Relief map & posters
Namibia's resources:
– Biodiversity
– Energy
– Water

Urban Sustainability Centre
Programmes to be offered
Semi-guided educational visit for all
Multi-day programmes
(mostly schoolchildren & teachers)
Young Urban Professionals programme

Thank you
www.nadeet.org
NaDEET
nadeet_namibia
NaDEET_Namibia

むすびにかえて

私たち生徒 12 名と教員 3 名は、日本があまりにも高い湿度にうなされる夏真っただ中、8 月 31 日から 9 月 9 日まで、ナミビア共和国スタディツアーへ行って参りました。生徒のほとんどが初めて足をつけるアフリカ大陸という広大な大地の中でも、南端から少し上がったその国は、昼は半袖、夜は防寒着を何枚も重ね着しなければならない極寒という気候でした。そこで私たちは 3 泊 4 日の NaDEET における ESD 実践プログラムへの参加と、ナミビアならではの自然を堪能し命や環境について考えを深める日々を過ごしました。

NaDEET では、まず 3 泊 4 日を共に生活する、4 人 1 組のファミリーを形成しました。食事の準備や片付け、お風呂やグループワーク全て共に行います。電力は全て太陽光、古紙で作った燃料、メモリのあるタンクに入った貴重な水とお湯、流すという概念を除去したトイレ、生活のすべてが「初めまして」で、本当の意味での「持続可能な」生活です。日本にいるときの何倍も気を付けて使った初日のバケツシャワーでしたが、翌日計量してみると思いの他消費していたり、使っていないが差しっぱなしにしているコンセントで知らずに電力を使っていたり、日本で「エコ」と言われる事柄の意味を初めて体感しました。あたりは砂漠に近いサバンナという土地柄もあり、植物や動物、昆虫や微生物が圧倒的に少なく、家なども無いことから、命の音がほとんどしない不思議な静けさに包まれていました。しかし、だからこそ、プラネタリウムを広げたような視界から溢れるほどの星空を見ることもでき、人間と自然の共存の難しさと妥協点の探り方に模索しました。

NaDEET での学びの後は、セスリムキャニオン、砂丘、デッド・フレイといった長い年月とともに姿を変えてきた自然の造形に言葉の通り入り込みました。人智の及ばぬものの不思議さ、偉大さ、またどこか心がすっと落ち着く癒しに、皆心を持っていかれ、久々の現代的な生活のあるホテルに泊まった頃には、もう、「NaDEET に帰りたい」という声が聞こえてくるほどでした。

SDGs 達成まで残り 10 年となりましたが、日本が達成しているのは「質の高い教育をみんなに」と「産業と技術革新の基盤をつくろう」の 2 項目に限られ、環境や消費に関わる「作る責任使う責任」「気候変動に具体的な対策を」は最も低い評価となりました。持続可能性はもはや推奨ではなく正義へと変化しています。このような時代を生き、また作る世代の私たちにとって、ナミビアで学んだ 10 日間とそこで生まれた小さな感情とアクションを繋げていくことはすでに正義であり、義務と言えるでしょう。ここに集ったメンバーが、それぞれの歩む道で、大きな火を消す一滴の水を運ぶハチドリとなることを願い結びといたします。

最後になりますが、事前学習でお世話になりました元協力隊員の寺内啓人さん、NaDEET 代表ヴィクトリアさん、10 日間のすべてをサポートしてくださったワイルドドックのマシューさん、ティナーシェさん、そして聖心女子大学教職員の皆様、何よりもアフリカという土地に送り出し支えてくれた家族の皆様に深く感謝いたします。ありがとうございました。

2019 年度聖心女子大学
ナミビアスタディツアー参加者一同

2019 年教育学科スタディツアー
「SDGs スタディツアー in ナミビア」報告書

2019 年 12 月発行　聖心女子大学現代教養学部教育学科
「発展途上国における教育問題」
〒150-8938　東京都渋谷区広尾４－３－１　永田佳之研究室
編集：2019 年度 SDGs ナミブ砂漠スタディツアー参加者一同

SOLAR COOKING ZONE